

独立行政法人文化財研究所の平成15年度に係る業務の実績に関する評価

◎ 全体評価

評価項目	評価の結果
事業活動	<p>全体として、中期目標・中期計画に盛り込まれた事業が計画どおり、あるいはそれ以上に成果をあげているものもあり、高い評価を与えることができる。データベース化を含め、発掘報告書、研究報告の刊行、各種研究会、研究発表などがなされ、また、アフガニスタン、イラクの文化財保存・修復、高松塚古墳やキトラ古墳の壁画保存などの急を要する重要な案件にも取り組み、努力されていることも高く評価される。ただ、これら文化財保護に係る課題は、今から30年前に比べれば、経験も技術的にも、また学術的にも蓄積がなされたといっても、未知の部分が多く、さらなる検討を期待したい。文化財保護に関連して次々と新しい課題が生じており、目標・計画にない事業の展開も要請される。こうした研究機関としては、5年間すべての研究課題や事業を固定化してしまいう制度設計には問題があると思われる。すでに目標を達した課題にかえて新たな課題に取り組むなど、独立の自律的な研究機関として、目標・計画の枠を越えた新たな事業展開ができる制度設計を期待したい。</p>
1 文化財に関する調査・研究	<p>文化財保護の実践とも連関した高度な調査・研究活動が継続的、計画的に進められており、高く評価できる。ただ、高松塚やキトラ古墳の壁画の保存問題に象徴されるように、中期目標になかったものが昨年引き続き大きなテーマになっている。これらの新たな研究課題もつぎつぎ出てきており、機動的で柔軟な研究計画の推進が望まれる。</p>
2 調査・研究に基づく資料の作成・公表	<p>調査・研究成果の刊行は順調に進められており、その努力は評価される。高松塚古墳、キトラ古墳の壁画の精度の高い高画質の画像の公表は、大きな意義を持つものと評価できる。また学界から期待されている重要遺跡の発掘報告についても、出土遺物の整理作業などその準備が意欲的にめめられており、研究所の調査・研究成果が出来るだけ早く学界の共有財産として活用されるように、さらなる努力を期待したい。なお、飛鳥資料館については、飛鳥・藤原地域の調査・研究の成果を基礎に、展示活動に努力し、一般観覧者がより一層関心を持ち、楽しむことの出来る展示とサービスの検討が行われるよう期待したい。</p>
3 文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供	<p>概ね適切に行われているものと判断されるが、部門により若干の差があるように思われる。研究所の各種データベースは、初期計画以上にデータベースの充実がなされ、アクセスが多いことについては高い評価を得ている。データ収集の目的意識や、それが公開された場合の利用者の利用イメージなど、将来像をしっかりと構築して、さらに利用価値の高い多様なデータベースの構築を期待したい。</p>
4 文化財に関する研修等	<p>地方公共団体や各地の博物館の職員に研究所が果たす役割はきわめて大きく、適切に進められているものと評価できる。また諸外国の文化財関係者に対する研修活動など、この分野での国際協力も高く評価できる。また、参加人数も多く、研修後の成果の評価が実施されていることは評価できる。東京文化財研究所の研修は対象が限定的であり、一般には研究成果の活用が見えにくく、この研修の必要性を、より一層地方の行政部門にアピールするとともに、内容を各地の要請や実態に合わせて行くことが求められていると思われる。併せて、民間のNPO、NGO、企業などへの研修も早い機会に実施を望みたい。</p>
5 文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する援助・助言	<p>この分野での研究所の多様な活動は高く評価できる。平城宮大極殿の復元の学問的裏付けを担保するのも研究所の従来からの研究実績の積み重ねであり、キトラ古墳の調査・保存問題でも、研究所の存在意義を遺憾なく示した。また地方公共団体や各地の博物館における文化財の調査・保存などの活動への援助も積極的に実施されている。ただ、部門によっては行政機関である文化庁などともっと密接に関係しながら、その存在意義を知らしめ、役割を果たされることを望みたい。これらの活動の前提となる基礎研究の充実と蓄積とともに、今後は依頼者側と互いに影響しあう関係が築かれることを期待したい。</p>

業務運営	<p data-bbox="582 117 1110 132">全体として業務の効率的運営に努力し、独立行政法人化の成果をあげているものと判断される。</p> <p data-bbox="178 184 302 199">1 理事長等の主導性</p> <p data-bbox="178 319 239 334">2 効率性</p> <p data-bbox="178 474 225 490">3 財務</p> <p data-bbox="178 738 225 754">4 人事</p> <p data-bbox="178 806 239 821">5 その他</p>	<p data-bbox="571 179 1346 288">調査・研究、その他各種の業務で大きな成果をあげ、文化財保護分野での国際協力の推進にも大きな役割を果たし、なおかつ業務の効率的運用も大きく上回る成果をあげている。国際的な分野での組織的な対応については、アフガニスタンでの活動などに代表されるように、世界の中で効果が出てきており、これらの点からも理事長のリーダーシップは高く評価できる。理事についても、特に考古学的な分野での資料の蓄積と公開・展示の成果は目覚ましく、奈良文化財研究所の運営に遺憾無くその指導性を発揮しており、理事長の補佐と併せて高い評価を与えることができる。</p> <p data-bbox="571 313 1346 448">運営費交付金を充当して行う業務の効率化は、平成13年度の2.92%、14年度の3.072%に引続き、15年度は2.90%を達成したことは高く評価できる。運営費交付金以外の資金を充当して行う業務（文化財研究所の受託業務）の効率化は1.70%であり、相当の達成であった。このように多くの分野で、業務の効率化を高める努力が行われており、評価できるが効率化に努めるあまり、研究や調査事業に支障をきたさないように留意してほしい。また、新しく生じた諸問題に効率的・効果的に対応するためには、すでに目標を達成したかと思える課題に替えて次なる新しい課題に取り組むなど、中期目標・中期計画に対する柔軟な対応が望まれる。その点主務官庁として文化庁の指導性も期待したい。</p> <p data-bbox="571 474 1346 707">○当期の収支の分析 収入は予算額に比し192百万円の増収（内訳は、受託収入附帯収入160百万円、展示事業等収入21百万円、寄付金等8百万円、附帯収入3百万円等）であった。支出は予算額に比し310百万円の増加（内訳は、受託事業費156百万円、運営事業費144百万円、寄付金等を原資とするもの8百万円、附帯業務費2百万円等）であった。 支出が増加した項目は、受託事業費は受託収入、運営事業費は目的積立金、展示事業等収入及び寄付金等の財源でカバーされている。 ○当期総損失の分析 損益計算書の当期総損失は31,067千円であった。その理由は、予算措置のない自己都合退職による退職手当104,065千円が発生したためである。もしこの発生がなければ、当期利益72,998千円となるはずであり、やむをえないものであった。なお、この退職手当相当額は翌期以降運営費交付金で財源措置される。 ○評価 以上、当期は総損失の発生となったが、総じて当法人の財務内容は良好であると考えられる。</p> <p data-bbox="571 738 1346 774">人事運営は適切に行われているものと判断される。限られた人員の中で新しく生じるさまざまな課題に臨機応変に対応できるよう、さらに柔軟な人事運営と組織の編成がなされることを期待する。</p>
その他		<p data-bbox="571 847 1346 951">高松塚古墳、キトラ古墳の壁画保存は、文化庁の所管するところであるが、国宝高松塚古墳壁画の報告に見られるように、実質的には文化財研究所が担うところが大きい。現状では万全を尽くされているように思われるが、より一層重点的な対応に期待したい。文化財全てについて満遍なく研究調査を進めるこれまでの方針はそれなりに理解できるが、次期中期計画に向けて他研究機関との連携協力や、時代が要請する新しい課題に対する取り組みなど、今後の課題に対応するため従来型ありきの発想ではなく、業務運営のあり方について全面的、抜本的な再検討を行う時期ではないだろうか。</p>

総 評

業務の効率化の推進をはじめ中期目標・中期計画が計画通り、あるいはそれ以上に着実に達成されている。また、文化財保護に関する国家的研究機関として、アフガニスタンの文化財修復や遺跡保存計画の策定をはじめこの分野での国際協力にも大きな役割を果たしており、平成15年度の業務実績に対しては高い評価を与えることができる。独立行政法人化の目的の一つである業務運営の効率化については、業務の質・量を落とすこと無く大きな成果成果があげられているものと高く評価できるが、飛鳥資料館の入館者の伸び悩みの解消については、展示内容の充実を図るなど、次期中期目標の策定に向けても十分検討するよう望みたい。また、いま一つの大きな目標である国から自立した独立の研究機関としての独自の運営の推進に関しては、5年間という長期中期目標がある意味では東轉となっているようで、必ずしも自由な発想にもとづく新しい事業展開の方向性は見えてこない。この点研究所側の積極的な問題提起を期待したい。

◎ 項目別評価

(段階的評定の区分の考え方)

- A：中期計画を十分に履行し、中期目標に向かって着実に成果を上げている（基準値に対して100%以上の実績を上げている場合）
 B：中期計画をほぼ履行し、中期目標に向かって概ね成果を上げている（基準値に対して100%未満80%以上の実績を上げている場合）
 C：中期計画を十分に履行しておらず、中期目標達成のためには業務の改善が必要（基準値に対して80%未満の実績しか上げていない場合）
 なお、特に優れた実績を上げた場合は、A'の評価を行うことができるものとする。

○ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画の各項目	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定	定性的評価及び留意事項等
		A	B	C			
国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、運営費交付金を充当して行う業務については、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。 具体的には、下記の措置を講ずる。	・業務の効率化状況				平成15年度運営費交付金額が、中期計画の見積と比較して、退職手当や特殊要因を除き約12%の減少という要因がある上で、全般的に経費の削減を図るなどの努力を行い、2.90%の効率化を達成した。	A	平成13年度の2.92%の効率化、14年度の3.07%の効率化に続き、中期計画の見積と比較して、退職手当や特殊要因を除き、15年度は運営費交付金が中期計画策定当初比12%（前年度比約2.03%）も減少するなかで、2.90%の効率化を達成したことは高く評価できる。 ○運営費交付金を充当して行う業務の効率化は次のとおりであった。（千円） 削減の起点となる基準額 =（運営費交付金-特殊要因予算-自己収入予算）÷（1-効率化許数） =（3,107,080-1,752-20,808）÷（1-0.11）= 3,084,520÷0.89 = 3,415,677 運営費交付金からの支出額 =決算額-特殊要因支出額-自己収入決算額-目的積立金支出額 = 3,251,431-106,136-33,983-85,859 = 3,025,454 効率化率 =（基準額-支出額）÷基準額 =（3,415,677-3,025,454）÷3,415,677 = 90.223÷3,415,677 = 2.90% ○運営費交付金以外の資金を充当して行う業務（文化財研究所の受託業務）の効率化は次のとおりであった。（千円） 効率化率 =（受託収入-受託事業費）÷受託収入 =（218,423-214,711）÷218,423 = 3,712÷218,423 = 1.70% ○物件費と人件費のそれぞれの効率化率は次のとおりであった。（千円） 物件費の効率化率 =（1,844,752-1,811,329）÷1,844,752 = 33,423÷1,844,752 = 1.81% 人件費の効率化率 =（1,270,925-1,214,125）÷1,270,925 = 56,800÷1,270,925 = 4.47%
	・経費の削減率	1.5%以上	1.5%未満 1.0%以上	1.0%未満	2.90%	A	
1 国際協力、国際共同研究について「国際文化財保存修復協力センター」への一元化による業	・組織の一元化の状況 ・業務の効率化状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センターに企画情報研究室を設置し、研究所が行う国際交流・協力等の連絡調整及び企画を行うこととした。また、東京、	A	一元化に向かう方向性で、イラク、アフガニスタンの文化遺産保護協力を中心に、具体的な行動がなされ、

務の効率化			奈良の関係職員による国際業務連絡会を随時開催し、アプガニスタン・イラク等からの具体的な協力要請案件について国際センターを中心として東京・奈良双方が連携協力・情報交換を行うなど、国際関係業務の効率化に努めた。		バーミンダッドの保存協力などの成果が表れた。東京文化財研究所国際文化財保存修復センターに企画情報研究室を設置する努力も認められるが、さらに再研究所の組織のあり方も含めより合理的の方策を採り、新しい事業を展開しうる人的資源の確保を検討すべきであろう。
2 両文化財研究所の共通業務の効率化	・共通業務の効率化状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	共通業務の効率化と経費の節減に資するため、東京・奈良双方の担当者が集まり「事務部課長連絡会」や「事務担当連絡会」において、業務の見直しや人事・給与事務の効率化（人事・給与システムの構築）について検討を進めた。	A	担当会議などを重ねて努力をしていることは認められるが、0化化による事務効率の成果など、具体的な成果を検証し、むしろ共通業務を減らすような方策を検討すべきであろう。
3 両文化財研究所の組織の見直しによる経費の削減	・組織の見直し状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	組織見直しのための検討会において組織の見直しを進めた。	A	努力のあとは認める。同質の業務や共同の業務で、より一層合理的、かつ成果を上げうる組織の構築や協業のシステム化を期待したい。
4 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進	・省エネルギー推進状況 ・廃棄物減量化推進状況 ・リサイクル推進状況 ・ペーパーレス化推進状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進を図るため、日常の節電節水等を周知徹底することをはじめ、夏季におけるノーネクタイ等軽装の励行、冷暖房の省エネ運転等を行った。また、複写機の利用節約のため部局別にカウンターガードを共用し本業牽引を行うとともに、コピー用紙は再生紙の使用、古紙の回収、所内紙の活用による回収文書のペーパーレス化を図った。また、「環境物品等の調達を促進するための方針」を定め、これを推進した。 なお、省エネルギーに係る光熱水量の節減について、電気料は約517万円（6.7%）、水道料は約164万円（11.3%）、ガス料は約323万円（20.2%）の節減となった。	A	省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化を推進するため、夏季におけるノーネクタイ等軽装の励行、冷暖房の省エネ運転等の節電節水に努めた。また、コピー用紙は再生紙の使用、古紙の回収、所内紙の活用による回収文書のペーパーレス化等を図った。この結果、省エネルギーによる光熱水量の節減は、電気料約5,168千円（6.66%）、水道料約1,641千円（11.33%）、ガス料約3,232千円（20.19%）となった。これらはいずれも省エネ効果が認められるものである。
5 セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進	・施設の有効利用の推進状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	施設の有効利用を推進するため、施設使用貸付規程を制定し、セミナー室や講堂等を外部へ貸付を行った。 <平成15年度 セミナー室等の外部貸付実績>	A	昨年度に比し、大分活用が進んでおり、努力の成果は評価できる。研究所の施設状況との適合性があるが、更に一層の活用が望まれる。学術的若しくは前向きな文化財に関する利用であれば、無料で利用も検討し、むしろ、場を提供することに、還元を図ることに力を強いて欲しい。公共機関や学会のみならず、非営利団体や民間などへの貸付をも検討願いたい。
6 連絡システムの構築等による事務の効率化	・連絡システムの構築状況 ・事務の効率化状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	総務部、各研究所間の通常の事務連絡をEメールにより行うとともに、会計システム、ネットワークを活用した会計事務の一元的管理、効率的処理を図った。	A	Eメールや会計システム・ネットワークの活用などの成果が認められる。
7 業務の外部委託、事務のOA化の推進等による効率的な事務の執行	・業務の外部委託推進状況 ・事務のOA化推進状況 ・事務の効率化推進状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	昨年引き続き、奈良文化財研究所の受付業務並びに各部局間の文書等連絡便を外部委託した。また事務のOA化を推進するため、同じ会計システムを使用している他の独立行政法人と共同でプログラム修正を図り、事務の効率化を進めるとともに、専任人で発注することにより、バージョンアップ経費の節減を図った。また、平成15年度から文書管理システムの運用を開始し、文書管理のOA化を推進した。 なお、外部委託の概況は以下のとおりである。 ・法人全体の外部委託業務は46件で、平成13年度から同一業者と契約しているものは33件である。	A	本年度の外部委託業務の実績は法人全体で外部委託している業務は46件であり、このうち平成13年度から同一業者と契約しているものは33件である。外部委託業務のうち36件は随量契約であるが、その事由は少額契約が28件、コンピュータシステムや機械警備など施設備品の制約によるものが6件。法令に基づき法人において委託業者の決定権がないものが1件、その他の理由が1件である。

			<ul style="list-style-type: none"> ・外部委託業務のうち36件は随意契約であるが、随意契約の事由は少額随契約が28件、コンピューターシステムや機械警備など施設備品の制約によるものが6件、法令に基づき法人において委託業者の決定権がないものが1件、その他の理由が1件である。 	<p>以上から、本年度の業務の外部委託は妥当であると思われる。将来的な課題としてさらなる効率化の手法等について積極的に検討することを期待する。</p>
8. 法人の自己点検評価のあり方について検討し、適切な自己点検評価を実施するとともに、今後の法人運営の改善に反映させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・自己点検・評価の実施状況 ・法人運営の改善状況 	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>昨年度の評価を、法人運営に反映させるとともに、昨年度の評価のあり方についての反省点を踏まえつつ、自己点検評価実施規程に基づき、平成15年度の自己点検評価を行うこととした。</p>	<p>A</p> <p>外部評価を含む自己点検評価のための努力は評価に値するが、評価自体が形式的なものとならないよう、これまでのスタイルにこだわらず適時適切にその方法等を見直すことが必要と考える。</p>

○ 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中間計画の項目	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定	定性的評価及び留意事項等
		A	B	C			
1 文化財に関する調査・研究 1- (1) -① ア 東アジア地域における美術交流の歴史や日本美術に及ぼした影響について解明するため、美術に関する資料を収集し、分析、研究を行い、得られた成果を報告書として刊行する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> 日本における外来美術の受容に関する調査研究では、美術という現象を対象として、其文化理解とその受容の経相を研究した。本年度は、従来の国内研究者によるミニシンポジウムに替えて、中国語圏、韓国語圏から研究者を招へし、研究会を開催して、各国の東アジア研究の動向を踏まえつつ、この問題を見直す努力をした。また美術部のオープンレクチャーを本研究と関連させて開催し、研究成果の一部を披露した。 中国壁画の研究では、クチ、ウルムチ、トルファン地区で現地調査を行い、特にクチでは、ユネスコのクムトラウ石窟保存修復事業の一環として、石窟壁画の修復方法を協議した。また、調査や研究成果の公表と情報共有を旨として、韓国の研究者を招へし、研究会を開催した。この他、トルファン地区の石窟壁画の材料、技法を解明するために、壁画断片の光学的手法による調査と撮影を行い、新発見を得ることができた。 重要美術作品資料集に関する研究では、海外所在の日本中世・近世の絵画、近代洋画、平安時代の乾漆像などの調査を行い、調査結果について口頭発表を行うとともに、今年度の研究成果報告書として「東寺観智院藏五大虚空藏菩薩像—美術研究作品資料—第一二冊」を刊行した。 日本・東洋美術研究文解の活用に関する研究では、「日本・東洋古美術文解目録」(仮称)の平成19年度刊行を目指して、校正作業を行った。具体的には、前年度までに収録できなかった約3000件のデータを新たに付加し、全ジャンルの欄目を決めた上で全データに分類コードをつけ、各年度におけるデータの収録状況を確認別に把握し、未収録号から書籍データを採取するとともに、原本との照合による校正を行った。 近世輸出品の実証的研究では、在外日本古美術品保存修復協力事業で、海外にある日本美術品が里帰りをする機会を捉えて、作品の調査を行った。また、チェコからフィリップ・スホメル氏を招聘して「チェコに遺る日本漆器」の講演会を開催し、江戸時代の輸出品に関する研究をした。 	A	日本における外来美術の受容や中国壁画の研究などで、東アジアの研究者との研究交流が有効に進められており評価できる。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	2件以上	1件	0件	掲載論文等数 5件 (論文 5件)	A	
	・学会、研究会等での発表件数	10件以上	10件未満 8件以上	8件未満	発表件数 11件	A	
イ 我が国の近代美術の発達に関して、時代ごとに調査・研究を進めるとともに黒田清輝に関する研究を進める。資料収集、分析、研究を通じて得られた成果を「大正前期美術展覧会出品目録」、「昭和前期美術資料集成」(仮称)、「黒田清輝画彩画題目録」等の目録として刊行する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> 日本近代美術の発達に関する調査・研究—昭和前期を中心に—では、「昭和前期美術展覧会出品目録」(仮称)刊行のための「0.0」の inputs を完了し、校正を行い、検査のための読み仮名の企画を開始した。また追加データを収集し、関連する展覧会の企画に協力し、平成16年刊行予定の「大正前期美術展覧会」(研究篇)のために研究協議会を開催し、研究発表を行った。 黒田清輝に関する再評価のための調査・研究—大正前期美術との関連を中心に—では、黒田清輝作品の光学的調査を進め、文解目録作成のために新たな資料を調査・収集し、成果を公表するとともに、彼の代表作「湖畔」の制作地である芦ノ湖周辺を現地調査し、関係者から取材した。 現代美術資料の調査・研究—資料収集・整理法の確立のための研究—では、「現代美術資料センター」から寄贈された資料の保存と活用のために、文獻名や美術家名等のキーワードを入力するとともに「ホームページ」においてデータの公開を行った。また同寄贈資料に含まれる画題に関する資料の整理と着手した。 	A	基礎資料の公開とともに、黒田清輝の作品について文化財研究の機能を生かした分析的調査・研究が進められていることは評価できる。また「東寺観智院藏五大虚空藏菩薩像」(美術研究作品資料第2冊)の刊行などは評価される。黒田清輝作品は東京文化財研究所に寄贈になった重要な文化財であり、今後も多面的な研究を継続していき、わが国近代美術史中の位置づけを明らかにすることが重要である。

					<ul style="list-style-type: none"> ・明治博覧会出品目録に関する調査研究では、成果として「明治博覧会博覧会出品目録 明治四十九年」を刊行した。42件の博覧会の出品目録を創製し、さらに総論、解説、博覧会毎の解題、出品者索引を付して、利用の便を図った。 (参考指標) ・収集資料数 13, 462件 ・調査件数 8件 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・学術雑誌等への掲載論文等数 	3件以上	3件未満 2件以上	2件未満	掲載論文等数 4件 (論文 4件)	A	
	<ul style="list-style-type: none"> ・学会、研究会等での発表件数 	2件以上	1件	0件	発表件数 4件	A	
ウ 伝統芸能に関する調査及び外国との比較研究のため、現地調査及び記録作成、分析を行い、得られた成果を報告書として刊行する。	<ul style="list-style-type: none"> ・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> ・伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究では芸能部の義太夫節・若手本目録化を行い、文楽の重方調査として、実演家及び観音作・床山担当者への聞き取り調査を実施した。能楽の特殊演出の調査を行い、記録簿作成事業として喜多六平太郎の謡を録音した。室町時代の資料に基づき、狂言謡の旋律を復元上演した。 海外予備調査として、韓国国立文化財研究所芸能民俗研究室と研究協力・交流の種別交換を行った。これらの成果は「芸能の科学」、公開学術講座等で行った。 (参考指標) ・収集資料数 533件 	A	地道な研究や聞き取りであるが、研究の目的を明確に説明することで、その成果が生きていることになると考える。 韓国の文化財研究所芸能民俗研究室との交流が始まったことは評価できるが、「芸能の科学」のみではなく、一般にも公表する方法を考えていただきたい。わが国の伝統芸能研究に如何なる形で生かされるのかについても見守りたい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・学術雑誌等への掲載論文等数 	3件以上	3件未満 2件以上	2件未満	掲載論文等数 3件 (論文 2件、解説等 1件)	A	
	<ul style="list-style-type: none"> ・学会、研究会等での発表件数 	2件以上	1件	0件	発表件数 5件	A	
エ 伝統楽器の変遷に関する資料収集・調査・研究を行い、得られた成果を所蔵目録及び報告書として刊行する。	<ul style="list-style-type: none"> ・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> ・日本伝統楽器の変遷研究では今年度広島県福山市安国寺所蔵楽譜および京都市霞光院の伝像(鎌倉時代制作)船内納入された極書の調査を行い、これに関連して多賀城跡から発掘された笛の調査も行った。また、早稲田大学演劇博物館COEとの共同研究で個人蔵の能楽鼓譜についてX線撮影などの調査を行い、その結果、筒輪が桃山時代まで遡りうる鼓輪の多くが彫りに着しいゆがみがあり、手彫りで形成していることが判明した。その他篠楽から能へ至る過渡期の鼓輪(奈良市在住個人蔵の鼓輪など)について調査を行った。これらの成果は、「芸能の科学」等で公表した。 (参考指標) ・収集資料数 74件 	A	この調査研究は普遍性があり将来一つの研究基準になる可能性が高い。限られた人員で日本の伝統楽器に関する基礎研究が着実に続けられていることを評価したい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・学術雑誌等への掲載論文等数 	2件以上	1件	0件	掲載論文等数 2件 (論文 2件)	A	
	<ul style="list-style-type: none"> ・学会、研究会等での発表件数 	2件以上	1件	0件	発表件数 4件	A	
オ 民俗芸能の上演目的や上演場所の歴史の変遷に関する調査研究を行い、民俗芸能の本来的意義を明らかにし、報告書として刊行する。	<ul style="list-style-type: none"> ・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> ・民俗芸能の上演目的や上演場所の調査研究において、今年度は「社会変化にももたず上演目的や上演形態が変化」と考えられる民俗芸能の調査研究では、主に千葉県安房地方のミノコドリという風流踊りについて現地調査を行った。「本来の上演場所以外での公開についての調査」では、ブロック別民俗芸能大会や「札幌YOSAKOIソーラン祭り」等の現地調査を実施した。これらの成果は、「芸能の科学」等で公表した。 (参考指標) 	A	無形民俗文化財はこれまでの保存という視点から、あらたに活用という視点が導入されており、大きな転換期を迎えている。その意味での研究は重要であるが、調査サンプルの取り上げ方について、意味のわからないものもある。しっかりした調査目的意識を持って選択してもらいたい。

	目的・内容の適切性 調査・研究実施状況	学術雑誌等への掲載論文等数			学術雑誌等への掲載論文等数			学術雑誌等への掲載論文等数			A	
		2件以上	1件	0件	2件以上	1件	0件	掲載論文等数 3件 (論文 2件、公開図書 1件)	2件以上	1件		0件
1- (1) -② ア 平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡について、以下の発掘調査を実施し、古代都城の実態解明のための調査・研究を行い、得られた成果を報告書としてF冊する。(平城宮跡) 第一次大極殿地区、第二次朝堂院地区、東院地区(藤原宮跡) 宮朝堂院跡、京内条坊街区	目的・内容の適切性 調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	学術雑誌等への掲載論文等数			学術雑誌等への掲載論文等数			学術雑誌等への掲載論文等数			A
			3件以上	3件未満 2件以上	2件未満	掲載論文等数 15件 (論文 7件、解説等 8件)			掲載論文等数 2件			A
			1件以上	—	0件	掲載論文等数 15件 (論文 7件、解説等 8件)			掲載論文等数 2件			A
イ 平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡以外の遺跡で上記アと密接な関係を有する以下の遺跡の発掘調査を実施し、比較研究を行う。(平城宮跡地区) 興福寺中心伽藍、興福寺大東院、興福寺一東院、東大寺中心伽藍、法華寺阿陀陀浄土院、平城宮東院南方遺跡(飛鳥・藤原宮跡地区) 石神・水	目的・内容の適切性 調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	学術雑誌等への掲載論文等数			学術雑誌等への掲載論文等数			学術雑誌等への掲載論文等数			A
			3件以上	3件未満 2件以上	2件未満	掲載論文等数 15件 (論文 7件、解説等 8件)			掲載論文等数 2件			A
			1件以上	—	0件	掲載論文等数 15件 (論文 7件、解説等 8件)			掲載論文等数 2件			A

<p>落遺跡、飛鳥寺跡</p>			<p>転換点を示す貴重な考古資料であることが判明した。 ・石神遺跡の発掘調査は、飛鳥の宮院遺跡として著名であり、昭和56年から継続的な発掘調査を行っている。今回は、遺跡の北端の状況解明に重要な地点である。昨年は、一昨年検出した7世紀前半～中頃の北限施設の北側を調査し、そこには建物群がなく、大きく3時期の清などの遺構を確認した。今年度はこれに続く溝等の遺構を検出し、さらに北側に続くことが明らかになった。また、大量の土器や木製品に加え、7世紀の仕丁削に関する木簡群も出土し、貴重な研究資料となった。なかでも、要所に切り込みを設けた木片が、文書を書く場合、紙面の上下左右の余白や行間・字間を一定にする算線を引くための定木であることが判明した。 (受託事業) ・興福寺大聖院の発掘調査では本年度は、東大池の西北限(北区)と西南限(南区)の2箇所を調査区を設けておこなった。調査の結果、北区では中世から近代にいたる各時期の整地面を確認し、大聖院庭園が中・近世をつうじて度々造り替えられた様子を確認した。一方、南区では東大池岸が中世以来の積土により段々に高く造成され、近世末期には現況のような急勾配の岸辺を形成していたことを確認した。この遺構の時期は、出土遺物などからすれば大聖院等宮院以前にさかのぼる可能性が高く、大聖院庭園に先立つ庭園遺構として注目される。【財団法人日本ナショナルトラスト】 (参考指標) ・出土品調査数7,341件 ・記録作成数2,130件</p>	
<p>ウ 上記発掘調査による出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に実施し、得られた成果を報告書として刊行する。また、古代飛鳥のイメージ再現研究として、模型、コンピュータグラフィック、出土品のレプリカを作成する。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・模型等作成状況 ・コンピュータグラフィック作成状況 ・出土品レプリカ作成状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・平城宮跡及び関連遺跡の出土遺物、遺構に関する調査等では平成15年度の発掘調査より出土した平城宮・京の木製品・石製品・土器・土版・瓦磚類、木簡などの整理や分析研究、出土遺物の図面及び写真の作成や分析研究を、年間を通じて実施した。また昨年以前からの発掘で検出された出土品遺物について、報告書刊行などのために再調査を行った。なお前年度に引き続き、併行して出土した動物遺物の保存処理も実施した。 ・飛鳥・藤原地域の出土遺物・遺構実測図・写真等の資料は、日常業務として計画的な整理作業をおこなった。報告書をめざして飛鳥池遺跡の資料整理を中心に、昨年以前の資料の整理・分析をおこない、その成果の一部を公表した。また、紀伊郡については、昨年度出土分を中心に整理を刊行。藤原京城と条坊に関する復原研究では、京域の千分の一地図の作成、講演会の開催をおこなった。また、川原寺寺域北限の調査で検出した、古代の銚堂跡遺土坑の復原模型を作成した。 (参考指標) 掲載論文等数20件(論文15件、解説等1件、公開図書4件)</p>	<p>A</p> <p>藤原宮跡、平城宮跡の調査にともなう出土遺物の整理研究なども順調に進んでいるものと評価できる。コンピュータグラフィックなど新しい手法でわかりやすく具体的に成果を知らせようとしている努力に敬意を表したい。</p>
<p>エ 文化財建造物の保存及び修復に必要な基礎データを蓄積し、分析・研究を行う。得られた成果により全国各地で行われている文化財建造物の保存のための指標となる研究報告書を作成する。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・平成14年度出版の中間報告書『木造建造物の保存修復のあり方と手法』の成果を受け、今年度は文化財建造物保存修復に関する一次資料の公開に向けた作業を徹底して行うこととし、保存事業に併行し撮影された写真乾板デジタル化およびデータベース作成作業を進め(最終中)、全5冊として企画している画像掲載の写真乾板目録のうち第1巻(青森県-福井県)を出版したほか、「重要文化財建造物現状変更説明」計4冊、保存修理工事に際して作成された建造物図面(保存図)全約3万枚の目録を出版した。 ・歴史的建造物、伝統的建造物群の調査研究では、単体建築調査として長谷寺本堂(奈良県桜井市所在)、加納屋深澤家住宅(長</p>	<p>A</p> <p>建造物調査はいずれも質が高く、その成果は全国の研究者の指標となっており、高く評価できる。</p>

				<p>野原楳川村所在・受託調査）、岡村所在の徳利屋原家住宅（受託調査）、片山家住宅（岡山県成羽町所在・受託調査）を実施し、各々調査報告書を刊行した。伝統的建造物群保存対策調査として楳川村平沢地区の調査を行った。この調査は2カ年継続で実施し、16年度で調査報告書を刊行する。このほか、朱雀門の経年変化測定とベトナム・ドンナム村集落保存対策調査を実施した。</p> <p>・楳川村平沢地区町並み保存対策調査ではまず調査地区内の建物を悉骨的に調査する1次調査（252棟）をおこない、この1次調査をもとに、伝統的建造物を抽出して2次調査（76棟）をおこなった。2次調査の過程で、主家に奥へ続く通り土間をもつものと、隣家との隙間に敷地奥へと続く通路を通るものとがみられ、この特徴が地区内における昭和30年代の建物についても確認でき、間取りの持つ伝統的建造物においても継承されていることが把握された。【長野県楳川村】</p> <p>・国指定に向けた物件調査として①徳利屋原家住宅調査では同家の主屋と土蔵について実地調査をおこなった。その結果、原家住宅主屋は江戸時代後期の建築で、数々の変遷を経ていることが明らかとなり、原家住宅の主屋は正面の出築造、一階の平面構成やカッパの大きな吹抜などに、伝統的木曾地方の町家の典型的な姿を示す。その一方で、建築後昭和初期まで旅館として使用されていた間に数度の改築がなされており、旅館の歴史が建築の変遷に反映された重要な遺構といえる。②加納庵深澤家住宅調査では、深澤家住宅の主な建造物はすべて江戸時代後期の建築であり木曾地方の典型的な町家の形式を今にこのしていること、中でも主屋の建築様式は洗練されており江戸時代における当地方の町家の一到達点を示すことなどが明らかとなった。【長野県楳川村】</p> <p>・町指定文化財旧片山邸（成羽町吹屋）を対象に、その文化的価値を明らかにすることを目的として実施した調査の結果、当家の附属屋を含めた屋敷構えが江戸時代末期に成立し、吹屋の近世商家として代表的な建築であること、主屋の主体部は18世紀末に建てられ、現在の規模になったのは江戸時代後期であること、また、明治期の数回の改造により近代の要素も併せ持つこと、建築年代や各建築の変移及び機能が所蔵史料により明確であること、道路を挟んで向かいに建つ分家3軒とあわせて吹屋地区の一角の町並を形成していることなどが明らかとなった。【岡山県成羽町】</p> <p>（参考指標） ・記録作成数2、296件</p>			
	<p>・学術雑誌等への掲載論文等数</p> <p>・学会、研究会等での発表件数</p>	<p>6件以上</p> <p>5件以上</p>	<p>6件未満 4件以上</p> <p>4件未満 5件以上</p>	<p>4件未満</p> <p>4件未満</p>	<p>掲載論文等数22件（論文6件、解説等2件、公開図書14件）</p> <p>発表件数6件</p>	<p>A</p> <p>A</p>	
<p>オ 文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿復原に関して、専門的・技術的な援助・助言を行うため、設計及び施工に関する実践的な研究を実施する。</p>	<p>・目的・内容の適切性</p> <p>・調査・研究実施状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>			<p>・第一次大極殿正殿復原施工に関する援助・助言として、文化庁、文部科学省文教施設部主催の連絡会議、文部科学省文教施設部主催の施工ワーキングで施工内容の助言を行うとともに、大極殿設計監理事務所との協議を通して耐寸図の検討および助言を行ったほか、屋根仕様研究会を2回開催し、匠住の瓦研究会についての記録を編集、出版した。また、調査研究として大極殿院様間の基本構造復原に関連して、古代建築の小屋構造についての調査研究を行った。</p>	<p>A</p>	<p>文化財研究所の適切な指導・助言により、第一次大極殿の復元事業は順調に進んでいるものと評価している。復原は工事中もさまざまな問題が出現する中、そのまま継続して指導を充実してほしい。</p>
	<p>・学術雑誌等への掲載論文等数</p> <p>・学会、研究会等での発表件数</p>	<p>1件以上</p> <p>1件以上</p>	<p>——</p> <p>——</p>	<p>0件</p> <p>0件</p>	<p>掲載論文等数3件（論文1件、公開図書2件）</p> <p>発表件数1件</p>	<p>A</p> <p>A</p>	
<p>カ 古代庭園に関する資料収集を行い、分析・検討の結果、報告書を作成する。また、これまで</p>	<p>・目的・内容の適切性</p> <p>・調査・研究実施状況</p> <p>・データベース内容充実状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>			<p>・奈良時代の庭園遺構の資料収集、現地調査を行い、各遺跡の発掘調査担当者等を集めて研究会を開催した。昨年度研究会の報告書を作成した。また、東アジアの古代庭園を比較検討するた</p>	<p>A</p>	<p>古代庭園に関し、中国・韓国の研究者を招いて開催されたシンポジウムは 東アジアにおける庭園の比較</p>

<p>に蓄積してきた登録範囲に関するデータベースを、島の両面から充実させ、逐次公開する。</p>			<p>め、中国・韓国から研究者を招き、日本庭園学会とシンポジウムを共催した。ホームページ上で公開しているデータベースに新規データを追加し、新たに画像の公開を始めた。国際的な庭園考古学ネットワーク構築に関しては、訪米し資料収集や講演を行い、米国の研究者を招聘し講演会を開いた。</p> <p>(参考指標) ・収集資料数 10 件 ・データベース追加収録数 11 件</p>	<p>研究を大きく前進させたものとして評価できる。</p>
<p>・学術雑誌等への掲載論文数</p> <p>・学会、研究会等での発表件数</p>	<p>6 件以上</p> <p>1 件以上</p>	<p>6 件未満 4 件以上</p> <p>—</p> <p>0 件</p>	<p>掲載論文数 8 件 (論文 4 件、解説等 4 件)</p> <p>発表件数 4 件</p>	<p>A</p> <p>A</p>
<p>・学術雑誌等への掲載論文数</p> <p>・学会、研究会等での発表件数</p>	<p>3 件以上</p> <p>4 件以上</p>	<p>3 件未満 2 件以上</p> <p>4 件未満 3 件以上</p>	<p>掲載論文数 3 件 (論文 3 件)</p> <p>発表件数 4 件</p>	<p>A</p> <p>A</p>
<p>1 - (1) - ③</p> <p>下記の古社寺所蔵の歴史資料・書翰資料等に関する原本調査及び記録作成等を行い、文庫の面から日本の歴史、文化の源流等の実態を探る。得られた成果につき、報告書及びデータベースを作成する。(調査対象) 興福寺、東大寺、薬師寺、法隆寺、西大寺</p>	<p>・目的・内容の適切性</p> <p>・調査・研究実施状況</p> <p>・データベース内容充実状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・創立 50 周年を記念「飛鳥・藤原京展」の精選展として秋期特別展示として「ASUKA 1/500」展を行った。今回の展示では表題ともなった飛鳥地域の 500 分の 1 の復元模型を展示し、最近の発掘成果を含めた、当時の景観を具体的に知ることができる。秋期特別展示では近年での成果がますます注目されつつある年輪年代法を取り上げた。調査研究活動では、東アジアの金属工芸史の研究の一環として、今年度は対馬の各地に所蔵される鑊の調査を行った。今回の調査では韓岡海神神社、美津島町大吉戸神社、巖原町歴史民俗博物館の 3 カ所において調査を行った。</p> <p>(参考指標) ・刊行図書 3 件</p>	<p>A</p>
<p>・市都府大寺関係では、興福寺・薬師寺・東大寺の調査を行った。興福寺は「興福寺典籍文書目録第三巻」(奈文研史料第 67 冊)として第 1 ～ 70 冊分の目録を収録し、刊行した。薬師寺は第 29 巻(第 5 冊)、東大寺は飛鳥庫所在書跡資料の調査を継続して調査を行い、調査成果の一部を「奈文研紀要 2004」に紹介した。また当研究所所蔵の北浦定成関係資料につき、野根「松の落ち葉」を昨年度に引き続き、「松の落ち葉 2」(奈文研史料第 65 冊)として刊行した。</p> <p>・唐招提寺境内の建造物や植生などの現状を把握するため、境内西辺部の現況図(1:800=1/200)を作成した。また、境内景観の主要構成要素をなす御倉中心部の樹木生育状況の変遷を把握する目的で、三時期の航空写真(1961/1974/1998年)を使い、昨年(2003年)作成した現況図と重ね合わせて樹木変遷図を作成した。また、明治以降の境内環境の変遷を把握する基礎資料として、奈良県立図書館に所蔵されている県庁文書のうち唐招提寺関係文書について複写・括字化を行い、唐招提寺所蔵歴史資料を昨年度に引き続き調査した。</p> <p>(参考指標) ・記録作成数 299 件 ・収集資料数 5,571 件</p>	<p>2 件以上</p> <p>1 件以上</p> <p>700 件以上</p>	<p>1 件</p> <p>—</p> <p>700 件未満 560 件以上</p>	<p>掲載論文数 4 件 (論文 1 件、解説等 1 件、公開図書 2 件)</p> <p>発表件数 1 件</p> <p>データ入力件数 2,955 件</p>	<p>A</p> <p>A</p> <p>A</p>
<p>・学術雑誌等への掲載論文数</p> <p>・学会、研究会等での発表件数</p> <p>・データベースへのデータ入力件数</p>	<p>2 件以上</p> <p>1 件以上</p> <p>700 件以上</p>	<p>1 件</p> <p>—</p> <p>560 件未満</p>	<p>掲載論文数 4 件 (論文 1 件、解説等 1 件、公開図書 2 件)</p> <p>発表件数 1 件</p> <p>データ入力件数 2,955 件</p>	<p>A</p> <p>A</p> <p>A</p>

<p>1-(2)-① ア 発掘調査及びそれらに関連する作業の手法・技術の開発・改良に関する調査・研究を行い、遺跡発掘の迅速化を図るとともに、深層遺構探査法や官街遺跡発掘調査法の開発を進める。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・深層遺構探査法の開発状況 ・官街遺跡発掘調査法の開発状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・官街遺跡発掘調査法の研究では、古代官街遺跡の出土遺物や各種の官街遺跡について、その特徴や発掘調査技術上の留意事項や問題点についてまとめた報告書『古代の官街 II 遺物・遺跡編』を刊行した。各地の集落・官街・寺院遺跡等の発掘調査資料の収集・整理・分析については、平成14年度刊行の報告書を中心に、国府・郡国・城壕遺跡や官街関連遺跡等の資料を収集整理した。また、史料活用しながら、建物本構図などの画像を取り込んだ官街遺跡データベースの構築を進めた。</p> <p>・古代官街・集落に関する研究集会を2003年12月12・13日の両日、「駅家と在地社会」のテーマで開催した。研究報告は考古学サイドから5本、文献史学サイドから3本の計8本で、駅家の構造、駅家と在地社会との関係、駅伝制と地方支配との関わりなどについて報告・議論をおこなった。参加者は143名であった。また、8月および2月初旬まで、昨年度の「古代の陶甎をめぐる諸問題」の研究集会の研究報告・討議記録を掲載した『古代の陶甎をめぐる諸問題』を編集し、12月に刊行した。</p> <p>・古代瓦に関する研究集会を開催した。今年度は川原寺式軒瓦の成立と展開について、川原寺の軒瓦に類似する文様をもつ摂津・河内・和歌山・紀伊・美濃・香取を主眼とし、上野および中国地方の川原寺式軒瓦瓦について議論した。全国の川原寺式軒瓦を軒瓦・丸瓦・平瓦のセットとして考え、丸瓦部が玉縁か行基かを確認する、組み合う重畳文軒平瓦の側面形が側先方が直線的か、などを検討した。2004年2月28・29日に名古屋市博物館を会場として開催した。</p> <p>(参考指標) ・古代官街・集落に関する研究集会 母集団：143人 調査方法：懇話調査 回収数：105 アンケート結果(満足数/回収数) 97%</p>	<p>A</p> <p>『古代の官街 II 遺物・遺跡編』の刊行は、研究所が長年蓄積してきた官街の調査のノウハウを整理したものととして古代官街の考古学的調査・研究の進展に資するところが大きい。また、「駅家と在地社会」を「川原寺式瓦」についての研究集会も最近の駅家研究や川原寺式瓦の研究の成果と問題点を明確にしたもので、今後の研究に資するところが大きい。</p>
	<p>・学術雑誌等への掲載論文数</p>	<p>4件以上 4件未満 3件以上 3件未満</p>	<p>掲載論文数5件(論文3件、公開図書2件)</p>	<p>A</p>
	<p>・学会、研究会等での発表件数</p>	<p>4件以上 4件未満 3件以上 3件未満</p>	<p>発表件数5件</p>	<p>A</p>
<p>イ 年輪から建築や美術の年代測定、自然災害の発生の確認を行う年輪年代測定法を開発する。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・年輪年代測定法の開発状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・年輪年代測定法の開発研究では本年度は、高画質(1,110万画素)のデジタルカメラを使い、精密な年輪画像を撮影し、当研究室で開発・運用中の年輪画像解析プログラムを用いて、高精度の年輪年代が測定できるようになった。実証にこの方法を採用して、京都府宇治市に所在する国宝宇治上神社本構(石殿・中殿・左殿)は1060年直後の建物であること、国宝正殿は1292年直後の建物であることが判った。この新発見は年輪年代法の適用範囲を広げる点で画期的なことである。(受託事業)</p> <p>・昨年度に引きつづき、修理中の国宝唐招提寺金堂部材の年代測定を実施した。部材そのものに彩色が施されているものについて、現場に専用の年輪読取装置を導入して、部材そのものから直接、非破壊で年輪データの収集をおこなった。同時に、高画質のデジタルカメラ(画素数：1100万)を使い、年輪データを収集する範囲の年輪画像を撮影した。こうして撮影した年輪画像はパソコンに取り込み、当研究室で開発・運用中の年輪画像解析プログラムを応用し、年代測定をおこなった。この方法によって、年輪年代が確定した部材もいくつかあるが、これらの年代をもって金堂の創建年代を絞り込むには時間尚早であり、さらに部材点数を増やす必要がある。(奈良県)</p>	<p>A</p> <p>研究所で開発された年輪画像解析プログラムによる高精度の年輪年代測定法は、今後の日本における年輪年代研究を大きく前進させるものとして高く評価され、その成果は日本の学会をリードしており、今後さらにその技術を広げ公開し、普及していくことが望まれる。高画質のデジタルカメラによる年輪年代画像解析プログラムの開発は、従来の基礎的研究から大きく展開したが、出来れば、この技術の普及に力を入れ、一研究所のみならず、多くの関わりにより考古学や、建築史、美術史等のみならず、広範囲な活用を期待したい。</p>
	<p>・学術雑誌等への掲載論文数</p>	<p>3件以上 3件未満 2件以上 2件以上</p>	<p>掲載論文数13件(公開図書13件)</p>	<p>A</p>
	<p>・学会、研究会等での発表件数</p>	<p>2件以上 1件 0件</p>	<p>発表件数3件</p>	<p>A</p>

<p>ウ 研究のための資料となる考古資料、出土品、動物遺存体等を全国各地から収集し、整理・分析することにより、遺物の分布状況、分期、編年及び当時の生活環境を解明する環境分析法を開発する。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・生活環境分析法の開発状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・動物遺存体による環境考古学研究として、各地の遺跡から出土した動物遺存体の整理、分析を行い、大阪・長原遺跡、磯城宮、大塚城、神戸・新保遺跡、出雲国跡、宮古島・アラブ遺跡、滋賀・小滝原遺跡、広島・帝釈弘法滝洞穴の分析結果の概文を執筆した。現生動物骨格標本については、特に、鹿角鳥取出土骨ツル博物館から、ナベツル、マナツル各2体の標本の寄贈を受け現在、骨格標本の作成中である。また、遺跡から出土する可能性が高い動物標本を選び、それぞれの主要四肢骨、頭蓋骨の実測図を継続して作成中である。 (受託事業) ・大阪城下町跡出土動物遺存体の同定及び報告書の作成において今回報告するのは、縄文期から近世初期にかけての、大阪城下町地域から出土した動物遺存体資料群である。総点数は約3000点である。各種の調査地点で様々な動物依存体が出土しており、これらの動物遺存体からは、縄文期から近世にかけての、城下町における動物利用が、食用のみに限らず、薬用、骨細工の素材など、多様な側面を持っていることが明らかとなった。 【財団法人大阪市文化財協会】 ・兵庫遺跡第14次調査出土動物遺存体の同定及び報告書の作成において、今回報告する資料は、兵庫遺跡第14次調査、七宮地点の発掘調査で検出された町屋に伴う埋構遺構から出土したものである。遺構の年代は江戸時代初期(1700?1800初)と推定されている。最も出土量の多い魚類遺存体のみを扱った。魚類遺存体の種類、体長などの特徴から、本試料は兵庫における漁業の様相を示すものと考えられ、魚類遺存体と漁具などから推定した兵庫における漁業主体は、沿岸内海における網漁であり、これらの漁法を駆使して、年間を通じて漁業が営まれ、季節に応じた魚を対象としていた。そして、近現代に見られる沿岸内海の魚種がほぼ揃っており、兵庫において、近世にはすでに、日本における漁業の基礎が確立されていたと考えられる。【神戸市】</p> <p>(参考指標) ・標本作製件数45点</p>	<p>A</p> <p>研究所の動物遺存体による環境考古学研究は、考古学の新しい可能性を示すものとして各方面から大きな期待を寄せられている。本年度も各地の発掘調査事業に協力して多くの重要な成果があげられた。</p>
	<p>・学術雑誌等への掲載論文等数</p>	<p>16件以上 16件未満 12件以上</p>	<p>掲載論文等数39件(論文23件、解説等16件)</p>	<p>A</p>
	<p>・学会、研究会等での発表件数</p>	<p>6件以上 6件未満 4件以上</p>	<p>発表件数10件</p>	<p>A</p>
<p>エ 保存科学及び考古科学に関する国際会議の開催により、「考古科学の総合的研究(COE)」のまとめを行い、研究報告書を作成する。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・国際会議開催状況 ・調査・研究実施状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>平成10年度～平成14年度事業</p>	<p>—</p>
	<p>・学会、研究会等での発表件数</p>	<p>1件以上 — 0件</p>		
	<p>・調査・研究報告書等刊行数</p>	<p>1件以上 — 0件</p>		
<p>1-(2)-② ア 文化財の彩色材料に関する非破壊測定法の実用化のための基礎研究を行い、得られた成果により、報告書を作成する。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・画像形成技術の開発に関する研究では画像の入力と処理の技術開発から形成画像の汎用的な活用へと研究の重点を移行した。これまでの研究成果については、本研究の中間報告書として「Light & Color—絵画表現の深層をさぐる—」を編集、出版したほか、発掘現場「紅白梅園発掘」(朝A美術館)に関する調査によって得られた新知見を報告するため、NDA美術館および美術史学会との共同主催で平成16年2月にシンポジウムを開催した。 ・光学的手法による美術工芸品の彩色に関する研究では、中間報告書として、国宝館氏物語絵巻の光学的手法による調査報告書を刊行するとともに、調査・研究の成果を論文や口頭で発表し、福島法華寺等において彩色木簡の調査を行い、その中に表れる彩色関係の結晶とその活用例を鑑賞することを目的に、彩色関</p>	<p>A</p> <p>意欲的な研究やそのための機器の開発は、新しい絵画史研究の方向を示すものとして高く評価される。ハンディタイプの分析装置ならびに各種分析法の応用開発の成果が花開いた観があり、具体的な分析結果が多く発表されていることについても高く評価される。</p>

					<p>保存環境について測定し、問題点を把握し、今後の展示環境改善のための方策を講ずるため、湿度度テーパーロガーを用いて、舟屋形展示ケースの内部、展示ケース外部、天守閣の外部の湿度度変化測定を行った。また、現地調査を行い、展示ケースの気密性を向上させ、さらにケース内に調湿ボードを設置することなどを通して、年間の湿度変動をさらに抑制することが可能であることがわかった。調査結果をまとめて委託調査研究報告書を作成した。【熊本市】</p> <p>(参考指標) ・調査、研究報告書等刊行数 2件 ・現地調査件数 5件</p>		
	・学術雑誌等への掲載論文等数	7件以上	7件未満 5件以上	5件未満	掲載論文等数 7件 (論文 7件)	A	
	・学会、研究会等での発表件数	8件以上	8件未満 6件以上	6件未満	発表件数 11件	A	
<p>エ 大型木製品の劣化、有機質遺物の材質分析、無機質遺物の非破壊構造調査に関する研究を行い、それぞれの保存処理法及び調査法を開発する。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・文化財修復素材・技法の開発状況 ・調査法の開発状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・真空凍結乾燥処理をおこなった大型木製品の保管環境における形状変化の追跡、レーザーラマン分光法を用いた考古遺物に対する完全非破壊非接触分析法の確立、X線CR法および対ラジオグラフィの開発、フーリエ変換赤外分光分析マイクロラマンビュレーションシステムによる有機質遺物の材質分析とデータの連携、有機質遺物および無機質遺物の材質分析および構造調査をおこない、有意な結果を得た。</p>	A	<p>くり型大型出土木製品の保存処理法として、真空凍結乾燥法が有効な保存処理法であることが確認できたことは大きな成果と考える。いくつかの分析法が文化財に応用される中で、非接触での分析と面的な分析のマッピングが具体化しつつあることを評価する。共に文化財に最も求められる技法と考える。</p>		
	・学術雑誌等への掲載論文数	11件以上	11件未満 8件以上	8件未満	掲載論文等数 23件 (論文 23件)	A	
	・学会、研究会等での発表件数	7件以上	7件未満 5件以上	5件未満	発表件数 10件	A	
<p>オ 古銅などの伝統的な修復材料の素材の物性の解明を行い、文化財修復の新たな素材と技法の開発研究を行うとともに、レーザーによる文化財クリーニング法の開発のための研究を行う。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・文化財修復素材・技法の開発状況 ・文化財クリーニング法の開発状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・漆・膠・古銅・布着苔などの伝統的修復材料の基本的な物性や修復技術の調査を行い、自然科学的な観点から再評価を与え、より作業性の高い修復材料の開発を行った。なお、本研究では膠・古銅・布着苔などの伝統的修復材料と漆・膠などの工芸品修復材料とに分けて調査研究を行った。 ・文化財表面に付着した汚れを、レーザーを使用することで文化財に損傷を与えずに除去するクリーニング法の開発をする。特に高松原古墳、キトラ古墳などの壁面表面に付着している汚れを対象に除去法の開発のために今年度はレーザー装置の改良を行った。</p> <p>(参考指標) ・調査、研究報告書等刊行数 2件</p>	A	<p>地味ではあるが、基本的、かつ重要な研究であり、当研究所が行う仕事として大いに期待される。伝統的修復材料について、絵画材料のみならず、工芸品材料、中でも膠の物性解明をされつつあることが評価する。新しいクリーニング法としてのレーザーが、キトラ古墳の壁面などに応用できるとすれば、今後の期待は大きいと考える。より一層の成果を期待する。</p>		
	・学術雑誌等への掲載論文等数	2件以上	1件	0件	掲載論文等数 3件 (論文 3件)	A	
	・学会、研究会等での発表件数	1件以上	—	0件	発表件数 2件	A	
<p>カ 古代遺跡の保存科学的の研究を行い、保存修復指針及びデータベースを作成・公開する。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・保存修復指針の作成・公開状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>・遺跡における斜面は、墳丘や土塁などのような「遺構としてのり面」及び遺構と直接的な関係をもたない「遺跡内地形としてのり面」に分類できる。前者の保護が遺跡の保存と本質的にかかわることは言うまでもないが、後者の保護も遺跡の保存ならびに環境保全上きわめて重要である。本研究では、「遺構としてのり面」と「遺跡内地形としてのり面」の特性を抽出しその保護における基本的な考え方をまとめようとして、各種斜面保護工法の適用についての調査研究を行い、さらに、これまでの各種事例の情報収集もおこなった。これらの成果は、次年度以降に公表する予定である。</p>	A	<p>各地で保存・公開されている各種の遺跡の保存法を確立するうえで、本研究に対する期待は大きい。今回の対象としたり面、斜面に関するデータは、地味ではあるがとて大事故なものと考えられ、その意義と保存における解析は大きな意義を持つと思われる。</p>		

				(参考指標) ・収集事例数 13事例		
キ	近代の文化遺産の保存修復に関する研究を行い、得られた成果により報告書を作成する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	・今年度も昨年に引き続き、鉄道車両と鉄道施設の保存修復を主なテーマとして研究を行った。ドイツ・イギリス・スイスの鉄道博物館関連の保存担当者や修復技術者などを招聘し、鉄道車両と駅舎、転車台など鉄道関連施設の保存活用等に関する問題点やその解決方法についての講演会を開催した。	A	近代文化遺産の修復保存法について、ヨーロッパ諸国の研究者との研究交流が進められたことは、高く評価される。新しい文化財の方向性を見据えた研究テーマとして期待される分野である。
		・学会、研究会等での発表件数	2件以上 1件 0件	発表件数 2件	A	
		・調査・研究報告書等刊行数	1件以上 _____ 0件	調査、研究報告書等刊行数 2件	A	
1-(2)-③ ア	平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査・研究を行い、「宮跡整備構想」に基づく具体的な整備方針を再検討するとともに、全国各地の大規模な遺跡の整備及び管理状況について、情報収集を行い、調査・分析の結果について報告書を作成する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	平城宮跡第一次大極殿の復元計画に沿って①様関連建物平面と屋根架構を調査して模型を製作し、屋根の納まり等を検討。②脚尾模型を製作して仕様、形を検討。③奈良時代の金具紋様の基本は玄白相華を明らかにし、風評を組成分析した。④古代の彩色・顔料を解明。⑤軟弱地盤の観測結果を分析し、ボーリング調査の必要性を指摘。⑥文蔵から大規模の機能分析。⑦宮内の活用実態を調査して今後の活用計画を検討した。大規模遺跡の整備・活用・管理に関する調査研究として本年度は主に中部地方と近畿地方の32遺跡で現地調査を実施した。現地調査の結果については、昨年度までと同様に、整備手法・技術、維持管理、学習資源、観光資源、オープンスペース、地域の文化中核施設、という6つの観点から現状と課題を取りまとめ、データベース化した。また、観覧型データベースシステムを構築し、データベース閲覧用のCDを製作し東日本の64件の大規模遺跡を収録した。(受託事業) ・特別史跡平城宮跡第一次大極殿地区復元整備に関する調査検討業務では文化庁より平城宮跡第一次大極殿復元に関する調査検討業務を受託し、①木部・屋根・版築の復元研究②礎石等に関する復元研究、③飾り金具等の復元研究④彩色に関する復元研究、⑤地盤に関する調査研究、⑥文蔵からみた大極殿の複われ方の研究、⑦大極殿地区の活用のための調査研究などの具体的な項目を挙げ、研究会を開催しながら調査検討を行った。【文化庁】	A	平城宮、藤原宮などの整備・公開・活用法の研究は、全国各地の遺跡保存のあり方に一つの手本を示すものとして大きな期待が寄せられている。平城宮第一次大極殿地区の復元整備事業が進む中でその果たす役割は大きく、研究所の存在意義が問われる研究といえる。研究は順調に進められているようであるが、平城宮の整備活用に関する必要ではなからうか。
		・学術雑誌等への掲載論文等数	2件以上 1件 0件	掲載論文等数6件(論文集4件、解説等2件)	A	
		・学会、研究会等での発表件数	1件以上 _____ 0件	発表件数3件	A	
イ	出土遺構及び遺物の公開・活用に資するため、遺跡の公開のための新たな保存法として、遺跡の露出展示法を開発する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・遺跡露出展示法の開発状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	・遺跡露出展示法の開発研究では、平城宮跡遺構展示館において年間を通してサーモグラフィによる調査と遺構表面に折出している塩類の分析をおこない、遺構の劣化に及ぼす水の影響を追跡調査した。また、奈良市近隣の生物山および春日山などにおいて岩石に関する基礎データの収集をおこなうとともに、奈良市春日山地頭谷石仏、平城宮跡式部宮築地下相築遺構などの石造文化財の現地調査を実施した。	A	地味な研究であるが、調査をもとにした基礎的研究として期待する。
		・学術雑誌等への掲載論文等数	1件以上 _____ 0件	掲載論文等数1件(論文集1件)	A	
		・学会、研究会等での発表件数	1件以上 _____ 0件	発表件数1件	A	
1-(3)-① ア	諸外国の文化財の保護制度に関する調査・研究	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	・ヨーロッパ諸国の文化財保護制度についての情報を収集整理し、その特徴を明らかにする事業の一環として、ドイツ、イギリスに引き続き、平成15年度はフランスに関する調査研究を実施した。現地調査、専門家招へい、研究会開催などを含む調査活動を行い、フランスの文化財保護について法制度・組織体系から活用事例まで幅広く情報を収集し、分析を行った。	A	日本の文化財保護制度充実のためにもヨーロッパの情報収集は貴重である。今回の文化財保護法の改正に際して、その役割を果たしたようであり、研究所が行う研究として妥当なものであり、今後の成果が期待される。

					(参考指標) ・調査・研究報告書等刊行数 1件 ・収集資料数 12件 ・招聘専門家数 3名		る。		
イ 東南アジアの文化財を取り巻く自然環境とレンガ等材の劣化原因に関する共同研究	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> 文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査・研究として、国内では江戸東宝博物館の障子障瓦瓦葺遺構における調査の結果、既にレンガ内に存在する塩類が潮解などを起すことにより現在の壁面を劣化させているものと判断されたため、その対策を検討している。また、海外ではタイのアユタヤ遺跡において、モデルを用いた実験から降雨が大きな問題と判断された結果を受けて、2004年3月には、実際の歴史的レンガ造遺造物において、建物上面を撥水処理する実験を行った。今後、経過を観望する。 文化財の保存修復に関する国際共同研究では、カンボジアのアンコール遺跡群およびタイのアユタヤ遺跡、スコアタイ遺跡において、環境計測調査を継続して行い、2002年12月～2003年12月のデータを解析してデータ集を作成した。また2003年12月には、バンコクで石造文化財保存修復の専門家を招いた会議を主催し、そのメンバーで周辺遺跡を視察しながら討議を行った。さらにベトナムにおいて、ベトナム情報文化省との協議を行い、ミソン遺跡の現地調査を行った。 	A	文化財保護の分野における国際貢献の推進のためにも不可欠な研究であり、審美に進められているように判断される。非常に大きな課題で、問題も多くより重要な研究・調査ならびに開発方法の検討を望む。今後の成果が期待される。		
			学術雑誌等への掲載論文等数	2件以上	1件	0件	掲載論文等数 2件(論文 2件)	A	
			学会、研究会等での発表件数	3件以上	3件未満 2件以上	2件未満	発表件数 3件	A	
ウ 中国及び中南米諸国との文化財の保存修復に関する調査・研究と技術移転・人材育成の実施	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施					<ul style="list-style-type: none"> 中南米諸国文化財保存協力事業-第1期 パナマの歴史地区の保存修復協力事業一では、パナマ市の歴史地区カスコ・アンティゴの保存のため、2002年2月にパナマ文化庁との間で取り交わした合意書に基づき、9月25日から10月24日の日程でパナマの若手文化財保存専門家1名を招いて研修を実施し、2月には、パナマ市のパナマ大学においてメキシコ、コロロンビゴ、ファイレン、パナマの日本の専門家による国際セミナーを開催し、都市遺産の維持管理、住民の貢献をテーマにアジアと中米の情報交換を行った。 中国文化財保存修復に関する調査・研究では、①人材養成：長期研修者1名(テーマ：洞窟の劣化と水環境についての研究)、短期研修者2名(テーマ：文化財の風化状態評価と修復材料の研究、画像管理システム構築の研究)を受け入れた。②研修者：ユネスコ保存事業に関連して韓国後継による環境計測を継続した。③龍門石窟研究院主催「龍門石窟保護のための検討会」に唯一の外国機関として招待され、参加した。④共同事業の円滑な運営をはかるため、韓玉玲龍門石窟研究院副院長を招いた。 本年度は、修復実施のためのデジタル写真撮影を行い、壁面全体の正射投影画像を作成するための基本写真および詳細写真の撮影を終了した。また、致勝研究員を2ヶ月間招聘し、練成用凝土の資料作成と劣化試験を行った。改良した凝土は、従来の凝土に比べて収縮が小さく流動性があり、珪藻土やカーボンファイバーの混入によって重量も軽くなった。さらに岩盤と土壁の間を充填接着するために必要な接着方も大きく、改良凝土は従来型の凝土よりも優れていることが判明した。 	A	文化財保護の分野における国際貢献の推進のためにも不可欠な研究であり、審美に進められているように判断される。
							(参考指標) ・収集資料数 7件 ・研修生受入数 4名(パナマ 1名、龍門 3名) ・招聘専門家数 2名		

		・学術雑誌等への掲載論文等数	2件以上	1件	0件	掲載論文等数 3件 (論文 3件)	A	
		・学会、研究会等での発表件数	3件以上	3件未満 2件以上	2件未満	発表件数 3件	A	
エ 地理情報システムを利用した文化財の防災計画に関する共同研究	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施				<ul style="list-style-type: none"> 文化財の防災計画に関する研究として、本年度は、GISを用いた台風被害のデータベース構築と(財)日光二社一帯文化財保存会の協力を得て、東照宮五重塔を対象に常時微振動測定調査を行った。特に、台風被害者のデータベースの構築では①指定文化財建造物の名称、建築年代、構造等の基礎データ、②台風による文化財建造物の被災状況を被災原因別・被災部位別に分類したデータ、③台風の進路、規模等のデータを、それらの位置情報とともに地図上に入力し、これらの情報を地図上でリンクさせ、関係を分析出来るようになった。 <p>(参考指標) 掲載論文等数 2件 (論文 2件) 調査・研究報告書等刊行数 1件</p>	A	地理情報システムの文化財保護への利用には大きな期待が寄せられている。研究は着実に進められているようであり、さらに広く各分野への利用法を追求すべきであろう。
オ 在外日本古美術品修復についての諸外国の博物館・美術館との協力事業及び研究機関・専門家との学術交流	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施				<ul style="list-style-type: none"> 日建学術交流に関して本年度は、7月から9月にかけての2ヶ月間、保存科学部の吉岡がドレスデン工科大学を訪問し共同研究を行った。研究テーマは、建材に使われている石材、窯熟材などの多孔質材料中の水分移動、熱移動に関するシミュレーション手法、水分特性測定法の研究である。11月には、ドレスデン工科大学建築環境研究所のハウブル教授、研究員のグルネワルド氏らを招聘して、「石造文化財、石造建造物中の水分移動解析と水分特性の測定」に関する研究会を開催した。また、ブラーウ氏らと、X線を用いた多孔質材料の水分特性測定を共同で行った。 北米の文化財保存研究機関との国際研究交流では、本年度も、これまで引き続き、カナダ保存研究所との国際研究交流を行った。わが国は2004年末に臭化メチルの全廃を控え、代替システムへの移行に東京文化財研究所でも取り組んでいるが、カナダではすでに腐蝕以外の代替殺虫法へ移行しており、代替法やシステムの研究、運用で学ぶべきが多々ある。そこで、本年度は、保存科学部の木川がCCIを訪問して、研究者間でこの分野の研究交流を行なうとともに、CCIのTom Strang氏の協力を得て、カナダの博物館、文書館を訪問し、担当者や協議することにより、代替システムの運用の実際と方法論についても調査を行った。 在外日本古美術品保存修復協力事業として、本年度は、絵画7件・工芸品3件の作品を修復した。また、絵画の事前調査ではベルギー・オーストリア・ポーランドの美術館を訪ね、36件の作品を調査した。工芸の事前調査ではポルトガル・スペインの美術館・王宮などを訪れ、61点の確認を調査した。この他、平成14年度の修復記録をもとに日英分の報告書を刊行した。 <p>(参考指標) 調査・研究報告書等刊行数 1件 派遣専門家数 2名 受入専門家数 4名</p>	A	カナダの場合、組織的に保存に関してもかなり柔軟に対応し、効果を上げていくようと思われる。カナダ保存研究所との交流は臭化メチルの問題のみならず、大きな成果がもたらされると期待す。文化財保護に関する国際研究交流が着実に進められているが、文化財研究所が世界に貢献できる重要な任務であり、今後も可能な限り続けて欲しい。
		・事業件数	2件以上	1件	0件	事前調査事業件数 2件	A	
		・修復件数	5件以上	5件未満 4件以上	4件未満	修復件数 10件	A	
カ 環境による不動産文化財の劣化状況調査と保存修復に関する調査・研究	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施				<ul style="list-style-type: none"> カンボディア王国アンコール遺跡群において、現地のアP S A R機構と共同研究を行い、文化遺産の保護と人材育成に貢献す。平成14年度に新たに対象遺跡として西トップ寺院を選定し、臭え書きを交換したことを受け、今年度は臭え書きに基づき西トップ寺院の発掘調査を行った。チリイースター島において、チリ国立文化財保存センターの研究員と共同でアイイ石像の保存に関する共同研究(暴露試験、石像の劣化状態調査) 	A	イースター島のモアイ像の暴露試験の実施とその成果を踏まえたモアイの保存処理が図られたことは大きな意義があると考える。今後、この保存処理結果のフォローが求められる。文化財保護に関する国際研究交流が着実に進められており、期待す

					をおこなった。 (参考指標) ・現地調査実施件数2件		るところが大きい。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	1件以上	-----	0件	掲載論文等数1件(解説等1)	A	
	・学会、研究会等での発表件数	1件以上	-----	0件	発表件数9件	A	
キ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、古代庭園及び陶磁器に関する調査研究及び研究協力	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、古代庭園及び陶磁器に関する調査研究のための中国、韓国との共同研究として今年度は、A中国社会科学院考古研究所との唐長安城大明宮で、太液池の共同発掘調査太液池に付随する特異な構造の建築物を発見し、蓬萊島南面の構造を明らかにすることができた。B遼寧省文物考古研究所との三燕文化文物に関する共同研究では、金属製品の考古学調査と自然科学的分析を実施し、中文『三燕文物精粹』の日本語訳を刊行した。C河南省文物考古研究所との鞏義市黄冶唐三彩窯跡と産品に関する共同調査では、昨年1年に続き発掘調査を実施し、唐青花器の発見など、黄冶窯跡の本体が次第に明らかになりつつある。D韓国国立文化財研究所との古代都城及び生産遺跡に関する共同研究においては、相互に研究員を派遣して関連遺物・遺跡を視察、意見を交換し有益な情報を得た。また、古代庭園に関する研究会を実施した。E文化庁相い事業では、中国・韓国から3名の研究者を招へいし、講演会、意見交換を行った。	A	日中、日韓の研究交流が着実に進行しており、評価できる。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	5件以上	5件未満 4件以上	4件未満	掲載論文等数6件(論文集5件、公開図書1件)	A	
	・学会、研究会等での発表件数	2件以上	1件	0件	発表件数6件	A	
1-(3)-② ア 文化財保存修復研究国際センター(IICROM)と共同で国際修復研修事業を実施する。	・研修実施実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・本年度は、9月16日～10月2日にかけて、9カ国10人の参加者を選ん「漆の保存と修復」を行った。漆に関するさまざまな講義、漆の製作と修復に関する基礎的な実習を行った。また、長野県木曾郡桶井村を訪ね、木曾漆師の製作状況及び漆の製造などの調査を行った。この研修の内容をまとめ「Urushi 2003, International Course on Conservation of Japanese Lacquer」を刊行した。 (参考指標) ・調査・研究報告書等刊行数 1件	A	漆というテーマで行ったことに意義を感じる。日本の文化財保護に関する中核的研究機関として、どうしでも必要な事業であろう。適切に進められているものと判断される。
	・受講者数	8人以上	8人未満 6人以上	6人未満	受講者数 10人	A	
	・受講者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団:10人 調査方法:匿名調査 アンケート結果(満足数/回収数)82%	A	
	・アンケート結果の研修内容・方法充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			漆芸品の取扱法や実技時間の充実とその内容をより実践的なものに変更した。		
イ 文化財の保存・修復に関する国際シンポジウムを実施する。	・シンポジウム開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・平成15年12月3日～5日にかけて東京国立博物館平成館大講堂で漆の保存と修復をテーマにした「漆が語る国際交流―漆を渡った文化財情報―」を開催した。今回は、イギリス・チェコ・ハンガリー・イタリアから専門家を招聘して、漆に関する新知見・修復概念・最新修復事例などの講演を行い、内容を総合討議した。なお、報告書は平成16年度に日英文で刊行する予定である。	A	目的意識のはっきりしたシンポジウムであり、その意義が認められる。日本の文化財保護に関する中核的研究機関として、その役割を果たし、適切に進められているものと判断される。
	・参加者数	170人以上	170人未満 140人以上	140人未満	参加者数 219人	A	

	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団：219人 調査方法：匿名調査 回収数：118 アンケート結果（満足数/回収数）98%	A	
ウ アジア文化財保存セミナーを実施する。	・セミナー開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・日本及びアジア各国間の相互理解を深め、国際協力の推進に貢献することを目的として毎年開催している国際会議「アジアセミナー」の第12回を韓国、ベトナム、フィリピン、スリランカ、イラン、タイ、インドおよび日本の専門家の参加を得て、平成15年12月8日から12日まで「文化遺産の保護制度と社会一層併または宗教、民族または民俗、経済」をテーマに東京文化財研究所会議室で開催した。	A	文化財保護に関する国際研究交流の推進の一環として重要であり、適切に進められたものと判断される。意義もあり、成果もあつたようであるが、その成果の要点を広く国民に示す努力も必要であらう。
	・参加者数	10人以上	10人未満 8人以上	8人未満	参加者数15人	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団：15人 調査方法：外国人参加者のみ対象の調査 回収数：8 アンケート結果（満足数/回収数）100%	A	
エ 国際文化財保存修復研究会を実施する。	・研究会開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・第14回国際文化財保存修復研究会（日時：平成15年7月1日 会場：東京文化財研究所セミナー室）平成15年4月に戦争の終結をみたイラクについて、イラク文化財の特質、またその置かれている状況についての情報を収集するために研究会を開催した。第15回国際文化財保存修復研究会（日時：平成16年1月30日 会場：東京文化財研究所セミナー室）西アジアをはじめ世界各国に残っている日干し煉瓦によって構築された文化遺産の保護が、緊急かつ重要な課題であるとの認識から、日干し煉瓦の保存についての研究会を実施した。	A	機を得たテーマと思われる。イラクについては困難な問題を抱えているが、日干し煉瓦による構築物の修復は、最近のイランでの地震による被災を幸免するまでもなく、緊急を要し、かつ重要であるため、研究会での意見交換と今後の在り方を論ずることは大いに意義あることと思われる。その成果が期待されるが、アンケートの回収数が少ないことは残念である。
	・参加者数	100人以上	100人未満 80人以上	80人未満	参加者数 192人（第14回 106人、第15回 86人）	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	（第14回） 母集団：106人 調査方法：匿名調査 回収数：40 アンケート結果（満足数/回収数）97% （第15回） 母集団：86人 調査方法：匿名調査 回収数：37 アンケート結果（満足数/回収数）97%	A	
オ 国際協力事業団、ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所等が実施する研修への協力を行う。	・研修への協力状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			（東京文化財研究所） ・2003年1月から国際協力事業団の助成により受け入れていた造子齋研究員の研修を、引き続き2003年9月まで行った。この研修では、鎌倉市の「やぐら群」をフィールドとし、そこで起きている劣化現象に対する保存対策を考察していく課程を訓練した。またユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所が実施する研修への協力を行った。 （奈良文化財研究所） ・国際協力事業団（JICA）、ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所（ACCU）等の研修事業への協力として、ACCUが実施する研修事業に研究員を講師として派遣し、日本の伝統的木造建築物の修理・保存に関する情報を提供するなど各種研修事業に参加協力した。その他、短期、長期の外国人個人研修を受け入れ、遺跡・遺物の保存修復科学技術に関する講義と実習授業を実施した。	A	文化財保護に関する国際研究交流の推進の一環として重要であり、適切に進められたものと判断される。

<p>1- (3)-③ 職員を外国に派遣し、文化財保存修復に関する指導・助言・協力及び国際研究交流を実施する。</p>	<p>・指導・助言・協力状況 ・研究交流実施状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>(参考指標) ・講師派遣数 8名 ・研修生受入数 41名</p> <p>(共同事業) ・ロシア・韓国等文化遺産保存修復に関する調査研究・技術移転・人材育成-第一期アフガニスタン文化遺産の保存修復に関する協力事業-として、平成15年度には次の4事業を実施した。現状調査および関係機関との意見交換を3回(6月7日～14日、9月6日～16日、6月16日～18日)実施し、アフガニスタン情報文化省との間で文化遺産の保存修復協力事業を実施するに際しての3種類の合意書および覚書を締結した。 (定住事業) ・文化庁の委託を受け、当研究所が実施したアフガニスタンの文化遺産保存修復支援事業を行った。1.アフガニスタン専門家に対する考古資料の修復技術研修(第1回:土製考古資料の保存修復):11月11～23日2.パーミヤーン遺跡の地下レーダーによる地下探査:10月1～2日【文化庁】 【ユネスコ文化遺産日本信託基金】によるアフガニスタンの「パーミヤーン遺跡保存事業」の一環として、ユネスコとの契約に基づいて実施されたものである。当研究所が分担しているパーミヤーン遺跡保存事業は「壁面の保存」、「予備的保存・活用計画案の策定」で、期間は2003～2005年の3年間で予定されている。7月12日～8月11日、9月27日～10月22日の2回に分けてミッションを派遣し、「予備的保存・活用計画案の策定」のための事前調査、および「壁面の保存」のための床面に敷出している壁面片を収集、石窗の一時閉鎖を行った。【ユネスコ】 ・2003年4月にユネスコ北京事務所と調印交換したユネスコ/日本信託基金龍門石窟保護修復プロジェクト第1期第2年目コンサルタント契約に基づき、1)環境計画、2)観測機器の故障修理指導、3)専門家会議および3者会議への出席、4)第1期最終年度(2004年)作業内容および経費の最終計画の作業を実施した。なお、SARSの影響により、当初の契約期間(2004年3月まで)を2004年5月までに延長した。【ユネスコ北京事務所】</p> <p>(参考指数) 発表件数 4件</p>	<p>A</p>	<p>アフガニスタンにおけるパーミヤーン遺跡の「壁面の保存」と遺跡全体の「予備的保存活用計画の策定」は、文化財保護に関する国際貢献として、またに時機に合った事業であり、その成果が期待される。当研究所の存在意義を知らしめるという点でも重要な仕事であった。</p>
<p>・職員派遣数</p>	<p>9人以上 9人未満 7人以上 7人未満</p>	<p>9人以上 9人未満 7人以上 7人未満</p>	<p>依頼により職員を外国に派遣した件数24人(※受託事業を除く)</p>	<p>A</p>	
<p>1- (3)-④ 国内においても文化財の保存科学等の分野において、各種研究機関・民間企業等との共同で調査・研究を行う。</p>	<p>・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>(東京文化財研究所) 文化遺産の高度メタデータコンテンツ化のための自動化手法研究は、レーザー三次元計測装置を使用して文化財の保存修復記録などの作成に寄与することを目的としている。史跡ゾッパ湖洞(北海道)では、昨年測定した三次元データを基に洞窟内への光の進入状態をシミュレーションした。修復に伴う記録保存を目的とした史跡前二子古墳(群馬県)石室、史跡王塚古墳(福岡県)伎師石室、タイ・アユタヤ遺跡などにおいての三次元(奈良文化財研究所) ・保存科学の共同研究として、①「アコースティックエミッションを用いた出土木材保存処理モニタリング法の開発」(京都大学農学部)、②「木炭を利用した考古遺物の保管」(秋田県立大学木材高度加工研究所)、③「出土近世漆器の保存処理に関する基礎的研究」(くらしき作楽大学)、④「埴ノ島B遺跡出土土漆製品の保存科学的調査」(北海道教委、南茅部町教委)をおこなった。</p> <p>(参考指標) ・学術雑誌等への掲載論文等数 5件 ・学会、研究会等での発表件数 4件</p>	<p>A</p>	<p>他機関との新しい開発面での共同研究は特に意義を持つと思われる。中でも、アコースティックエミッションの実用化は、文化財の静的な中での内部変化を継続的、また面内では立体的に把握する方法として効果が期待される。ただし、共同調査・研究の対象に民間企業や民間の研究機関が見られないことには問題が残ろう。</p>

1-(3)-⑤
外部機関等からの求めに応じて、文化財の保存・修復に関する実践的研究を実施する。

目的・内容の適切性
調査・研究実施状況

定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施

- 平成15年度は、受託研究として、文化庁5件、国立博物館3件、地方公共団体及び財団等9件を実施した。
(受託事業)
【東京文化財研究所】
・江戸時代後半に活躍した海絵師・原羊造斎は、酒井抱一の下絵をもとに再絵をしたことで知られている。羊造斎の再絵は、本格的な江戸再絵として技巧的であり華やかな表現を伴うものが多い。本作品は、文政12(1829)年に、牧江藩士の松平不昧の命日になんて製作された「片輪船再絵燻燻集」である。今回、近世再絵燻燻集の保存修復に関する調査研究では、本作品の漆塗り及び再絵に関する調査研究及び保存修復を行った。
【静嘉堂文庫美術館】
・「透真船(木造彩色)」「馬艦船(木造彩色)」「東京国立博物館所蔵」の二艘についての調査・修復事業では、X線撮影、彩色顔料の蛍光X線分析、使用木材の同定調査を行った。彩色顔料は、ポータブル蛍光X線分析装置XT-35を用いて真鍮船15カ所、馬艦船5カ所の彩色顔料の化学組成を調査研究をした。透真船、馬艦船の船底部分の白色部分からは胡粉、船体の白色模様部分から鉛が、赤色からは水銀と鉛が検出されている。このことから、修復では①クリニク②木材強化③虫喰い木材の処理④彩色顔料止め等の各作業を行った。【独立行政法人国立九州博物館(仮称)設立準備室】
・戦国時代から近世初期にかけての武器器具は、消耗品として扱われ現存する作品の少ない分野である。本研究では現存する近世初期の鎧を対象に、戦国時代の製作技術および装飾技法について調査研究を行い、あわせて保存修復を行うものである。今回は、大友城天守閣所蔵「槍掛袖月岡時槍刺」に対する調査研究であり、本作品の裏面に「正背面には命の平高絵で描かれた月と猿、梨地と平高絵で描かれた立浪文があることなどから何れも16世紀後半の技法の特徴が認められる。本作品の調査の結果、損傷状態が明らかとなり、適切な保存修復を行った。【大阪城天守閣】
・琉球漆器における保存と修復技法に関する調査研究では、第二尚氏時代、首里城内に円覚寺を造立、その内部に歴代の琉球王とその王妃の名前を事無運むた尚書で記すことも貴重とされる位牌を対象とした。今年度修復した位牌は、第二次世界大戦の沖縄戦でアメリカ軍の発砲した機関銃弾によって正面向かって左の柱が吹き飛んだ状態で保存されてきたものである。今回、木地構造及び漆塗りの調査研究及び保存修復を行った。【琉球王朝文化遺産復興財団】
・「十組盤」についての調査・修復を実施した。通常、香道で使用される盤立ものは、製馬香・吉野香などの四種盤である。東京国立博物館の所蔵する十組盤は、世界中で唯一組の盤立ともして知られている。今年度は、盤立てに使用される10組120個の駒と象製の盤を対象に調査研究を行い、あわせて保存修復を行った。【東京国立博物館】
・「重文文化財金象嵌銘花形細頸木刀(考古)」についての調査・修復では、すでに、形態的調査研究は平成14年度終了していたため、その結果をもとに①付着していた白い汚れをアルコールで濡らした綿棒を使用して除去した。②脆弱になった鍔を今日するためにアクリル樹脂(パラロイドB72)10%キシレン溶液を減圧含浸した。③浮いている象嵌線をアクリル樹脂(パラロイドB72)溶液にマイクロバルーンを混和して粘土状にして、その樹脂を周囲に詰め象嵌線を固定した。なお、修復の基本方針としては、現状維持を原則とした。【独立行政法人国立博物館東京国立博物館】
・「船月再絵二重手箱(三井文庫蔵)」は、木製黒漆塗りで甲盛り、胴張り、印籠造りの二重手箱である。再絵は、和漢朗詠集の中の和歌を文様化したもので月・用・秋草などを高再絵と平文で表わし、文様の中に文字を溶めた基手の手法を用いた典型的な室町時代の技法を示している。今年度の作品を対象とした調査研究および修復を通じて室町時代の再絵手箱の技術的解明を行った。【財団法人三井文庫】
・柚田青貞組工は、富山藩前田家がかかえた柏田一門によって代

A

積極的に多くの受託研究を受け入れたことは、高く評価できる。また多方面にわたる研究所の研究成果を活用して、その成果が遺憾なく発揮できたようである。研究開発、分析などの成果の実践的な活用場として大きな意義を持ち、その具体的な事例が報告されていることは評価される。特にそれぞれの専門分野にあった対象物であることは理にかなっており、今後の長期的な安定性を含めた成果に期待したい。

り々作り続けられた螺鈿漆器である。柚田家は、藩主のための大型注文の他に印籠や硯箱などの精緻な作品を数多く製作している。その特徴は、薄貝螺鈿・細い平文・梨地といった再輪とは違った取り合わせにある。今回富山藩柚田青貝組工「陸奥玉川荘之図料紙箱」の修復及び技法分析を通じて、その技法解明の研究を行い、あわせて保存修復を行った。【富山市】

・重要文化財群馬県舞台1号出土土品の保存修復事業の本年度の修復対象品は土器である。土器は欠失部を石膏で補修されていることが多いが、石膏が土器粒子の間につきまり取り除くことが困難であった。石膏で補修した部分の除去に超音波メスを使用することによって比較的問題なく取り除く技術を開発することが出来た。また、土器破片の接着は、エポキシ樹脂やセルロース系接着剤を使用した。【文化庁】

(奈良文化財研究所)

・重要文化財加賀寺遺跡より出土した銅鐸1点に対して、肉眼および顕微鏡による観察、赤外線・紫外線による観察、X線ラジオグラフィによる調査、X線CTによる調査、蛍光X線元素分析法による材質調査、X線回折法によるさびの同定、レーザーラマン分光分析法による表面付着物の調査、金属成分の化学分析調査をおこなった。これら事前調査により把握された劣化状態を考慮に入れつつ、保存修復を実施し良好な処置を施すことができた。【文化庁】

・福岡県平塚方形周溝墓より出土した青銅鏡10点について、事前調査を実施した。事前調査は、顕微鏡等による肉眼観察を実施した後、材質調査としてX線分析などをおこなった。また、内部構造の調査としてX線ラジオグラフィによる調査等を実施した。その結果、肉眼では識別できない微細な亀裂が多数発生しており、またドット状を呈するさび孔にはブロンズ病の菌落が検出され、保存修復にあたっては適切な安定化処置が必要であることが判明した。事前調査の結果をもとに、保存修復指針を計画・実施した。修復にあたってはブロンズ病に対する科学的な処置を基本に、クリーニングと安定化処理をおこなった。【文化庁】

・京都市西院寺から出土したクリ製漆器の真空凍結乾燥法による保存処置研究では、真空凍結乾燥処理が終了した後、重量変化・寸法変化、および温度変化をモニタリングすることにより、外環境への馴化の過程を追跡した。その結果、真空凍結乾燥終了後においてもさらに水分の蒸発によると思われる重量減少や若干の寸法変化を示したが、その変動は経過観察期間内においてはほぼ安定期に移行したものと判断できたと保管・展示はできる限り安定した湿度環境下でおこなうことが望ましいとの結論を得た。【財団法人京都市埋蔵文化財研究所】

・妻木晩田遺跡の惣穴住居址を将来的に露出展示により公開することを目的に、種々の土壌強化処置を施した土壌サンプルを遺跡現地において暴露試験をおこない、その強化処置の評価をおこなった。その結果、用いた強化材料について、それぞれ長所・短所が明らかとなったことから、短所を改善すべく新たに強化剤を開発する見通しを持つことができた。【鳥取県】

・青谷上寺地遺跡から出土した遺物の顔料分析をおこなった。しかしながら、ほとんどの遺物が破損を生じやすいものが大半であることから、調査には、ビデオマイクロスコープ、蛍光X線元素分析の2つの方法を鳥取県埋蔵文化財センター現地で適用した。調査の結果、赤色顔料のほとんどが赤鉛であること、ベンガラはごく限られていること、黒色顔料は鉄を含む化合物(未同定)であることなどが明らかとなった。また、ビデオマイクロスコープによる観察の結果、墨などの製作時における彩色の順序などについて重要な知見を得ることができた。【鳥取県埋蔵文化財センター】

・鬼ノ城における古代土塁遺構の復原整備のための技術的な手法を開発するために、種々の土壌強化処置を施した土壌サンプルを遺跡現地における暴露試験による強化処置の評価および温度湿度およびラジオグラフィによる現地の環境調査を実施した。その結果、土壌については十分な凍結対策は必要不可欠であり、現在おこなっている樹脂を添加した版築などの実験結果と併せてその保存対策を講じるべきであると結論を得てい

			る。【岡山県総社市教育委員会】		
1-(3)-⑤ 地方公共団体との共同による発掘調査を実施する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	今年度は、共同による発掘調査は行っていない。		
2 調査・研究に基づく資料の作成・公表 2-① ア 研究報告書、年報、研究論文集、図録等を12年度の実績以上刊行する。	・内容の充実状況 ・刊行の適時性	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	(東京文化財研究所) ・『東京文化財研究所年報』(年一冊)、『東京文化財研究所概要』(年一冊)、『東文研NEWS』(年4号)の編集を行った。『東京文化財研究所年報』は研究所における活動の総括として編纂するもので、自己点検評価、外部評価における基礎資料として活用できるような編集した。『東京文化財研究所概要』は研究所の組織の紹介や、各部ごとの当該年度のプロジェクトの紹介を、視覚的にわかりやすく、日英二カ国語で行った。『東文研NEWS』は四半期ごとに編集、刊行したほか、各号は、PDFファイルに変換し、ホームページ上で公開した。 ・『芸術の科学』第31号を以下の内容で刊行した。『鎌倉源に制作された横笛—仏像胎内に納入された三例をめぐって—』高桑いづみ・野川美穂子、『ミノコオドリ系鐘—鹿島踊・弥勒踊の原像から距離を歩いて—』儀木悟、『ブロック別民俗芸能大会出演演目一覧』宮田繁幸、『東京文化財研究所芸術部所蔵義太夫節解附付種古本について』鎌倉恵子、『阿義太夫節種古本目録』鎌倉恵子。 ・平成15年11月20日に、『民俗芸能に関する情報の発信と共有』をテーマに開催した第6回民俗芸能研究協議会の事例発表・総合討議の内容等を『第6回民俗芸能研究協議会報告書』として刊行し、関係者に配布した。 ・平成14年12月に東京文化財研究所主催で行った第26回文化財の保存に関する国際研究会「くくモノ 一時間・空間・コンテクスト」の報告書を刊行した。 ・第13回、第14回国際文化財保存修復研究会で行われた報告、討議の内容をまとめ、参考資料を加えて報告書を作成し、関係機関、専門家に配布した。 第13回国際文化財保存修復研究会報告書(2004年3月発行)(B5版、176頁) 鎌倉『文化財保護制度の研究』アフガニスタンの文化遺産の復興をめざして 第14回国際文化財保存修復研究会報告書(2004年3月発行)(B5版、128頁) 鎌倉『文化財保護制度の研究』イラク文化遺産保護の地平線 プロジェクト『文化財保存に関する国際情報の収集及び研究—ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と国際事例—』これを2014年度に編集したイギリスの文化財保護制度に関する調査研究の報告書を編集、印刷刊行し、国内の組織、専門家に配布した。 ・平成14年11月に実施した「第11回アジア文化財保存セミナー」の記録集を英文にて編集し、印刷刊行し、国内外の組織、専門家に配布した。同セミナーは、アジア8カ国における文化財保護について、各国がそれぞれの法制度より、それをどのような組織、人材、財源によって運用しているかについて、事例紹介と討議を行ったもので、この記録集は、各国の発表と、質疑応答の内容をまとめたものである(B5版、320頁)。 ・現在、東京文化財研究所が所蔵する図書は約11万冊、雑誌は約2800におよぶ9万冊を数えている。資料閲覧室では、所蔵図書資料の目録作成を五年計画で進めており、2003年度は、昨年度に続いて、『東京文化財研究所所蔵目録3 日本東洋古美術関係 和文編』を刊行した。 ・『日本美術年鑑』の平成14年度版を、平成13年度美術界年史、美術展覧会(企画展、作家展、団体展)、美術文献目録・定期刊行物所載文献、同・美術展覧会図録所載文献(企画展、	A	非常に充実した刊行成果であり、多くのすぐれた調査・研究報告書等が刊行されたことを高く評価したい。さらには、発表論文の内容が、どのくらい外部の研究者や学会で評価されているか検証する必要があるのではないか。

- 作家部、物故者という構成により刊行した。
- ・「美術研究」の刊行に関しては、東アジア美術研究の現状を的確に反映させるために、新しい編集方針を協議、検討し、その方針に基づいて、380号、381号、382号の3冊を刊行した。論文、図版解説、研究資料というこれまでの構成に、新たに、中国語圏や韓国語圏の東アジア美術研究の新しい成果の翻訳掲載、書評、展覧会評、研究ノート等を加えて、内容の一層の充実を図った。
 - ・「光学的手法による国宝源氏物語絵巻調査報告書」を、X線撮影とエミシオグラフィによる分析結果、蛍光X線による顔料分析、可視域励起光を用いた蛍光反応に診る源氏物語絵巻という構成により刊行した。
 - ・「明治期府県博覧会出品目録」を刊行した。明治4年の大学南校物産会から明治9年の富山展覧会までの42件の博覧会の出品目録を整理し、総論、解説、博覧会毎の解題、出品者索引を付けて、利用の便を図った。
 - ・「保存科学」第43号を(1) 金属の伝統的着色について (1) 一層の古色仕上げとその色変化 (2) 装こうにおける打ち刷毛の効果-接着力を中心に他、16件の研究論文・報告を掲載し刊行した。
 - ・日独学術交流は平成11年度から14年度にかけて、中世の彩色木彫像の研究を中心に彩色文化財に関する共同研究を行ったが、その成果をバイエルン州立文化財研究所と共同で論文集(英語・ドイツ語)として「歴史的彩色」というタイトルで出版した。ドイツ側は主にバロック、ロココ時代の彩色木造彫刻の彩色材料・技法とその保存について報告し、日本側は切金装飾や金泥塗りも含めた木造彫刻の彩色材料・技法およびそれらの歴史に関する研究を報告した。本の内容は、1. 18世紀ドイツの彩色彫刻に関する研究、2. 日本の彩色彫刻に関する研究、3. 科学的研究の3章に分かれ、全部で27編の論文を含む、576ページ(24.0×30.0cm)の本で、日本の彩色彫刻の歴史や材料・技法の研究を世界に紹介する英文の研究書としては初めてのものである。
 - ・平成14年度発行の「文化財の生物被害防止ガイドブック」を改訂し、平成15年度版を編集した。印刷(2万部)は別途、文化庁経費でまかなわれ、各都道府県教育委員会を通して国宝・重要文化財所有者等に配布された。当所からの直接配布は、本年度は図書館・史料館・公文書館など、アーカイブを扱う施設を中心におこなった。また副教材として「文化財生物被害防止ガイド 1. 害虫対策の進め方」、「文化財生物被害防止ガイド 2. 対処法の実践」(各30分、VHS)のビデオ教材の作成を行った。(奈良文化財研究所)
 - ・年報等として『奈良文化財研究所紀要2003』ほか小計2種、ニュースは『奈良研ニュース』ほか小計2種、研究報告書・研究論文集等は『古代遺蹟に関する調査研究-飛鳥時代庭園遺構の検討-1』ほか小計9種、図録等は『古年輪』ほか小計5種、史料等は『平城宮木簡6』ほか小計15種、総計33種、総部数70,000部を刊行した。また、調査研究の成果を順調に公表できた。
- (参考指標)
- ・定期刊行物配布部数 2,309部
 - ・年報配布部数 3,200部
 - ・研究報告・研究論文配布部数 16,044部
 - ・ニュースの配布部数 23,400部
 - ・図録配布部数 20,100部

定期刊行物刊行数	4件以上	4件未満 3件以上	3件未満	定期刊行物刊行数 4件	A
年報刊行数	2件以上	1件	0件	年報刊行数 2件	A
研究報告書・研究論文集刊行数	16件	16件	12件	刊行物のタイトル数 30件	A

		以上	未満 12件 以上	未満					
	・図録刊行数	3件以上	3件未満 2件以上	2件未満	刊行物のタイトル数 7件			A	
	・ニュースの刊行数	5件以上	5件未満 4件以上	4件未満	刊行数 12件			A	
	・新聞、雑誌等への寄稿及び資料提供数	200件 以上	200件 未満 160件 以上	160件 未満	記事掲載件数、取材・インタビュー件数 453件			A	
イ 14年度に奈良文化財研究所の創立50周年事業としてこれまでの研究成果を総括し、特別展示・出版事業を行い、国際シンポジウムを開催するとともに、巡回展を開催する。	・特別展示実施状況 ・出版物刊行状況 ・国際シンポジウム開催状況 ・巡回展開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			平成14年度事業			—	
ウ 公開学術講座、公開講演会、現地説明会を開催する。	・公開学術講座開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> ・12月6日、芸能史研究会との合同で「はやり歌撰の諸相」をテーマに芸能部公開学術講座を開催した。内容は以下の通り。講演Ⅰ・「近世末の舌辯芸と流行歌謡」萩田清（梅花女子大学）、講演Ⅱ・「狂言歌謡の旋律源流」高桑いづみ（芸能部）、実演・野村小三郎、講演Ⅲ・「三味線組歌とはやり歌」野川美穂子（芸能部）、実演・富成清女・野村小三郎、講演Ⅳ・「風流節・かぶき節とはやり歌」和田修（早稲田大学）、実演・徳山古典芸能保存会。 ・公開学術講座「美術部オープンレクチャー」は、美術史研究の成果を一般に公表するために、毎年秋に開催しており、第37回目にあたる今年度は、金曜日と土曜日の午後、2日連続で開催し、「日本における外来美術の受容」をテーマに柳村、4名の講師が、同名の研究プロジェクトの研究成果を総まとめて、中世から近世の絵画の問題を中心にして発表した。 ・能の特殊演出「小書」をテーマに、以下のプログラムで芸能部夏期学術講座を実施した。第1日（7/15）序論-小書とはなに-、小書の流れ、第2日（7/16）小書の考案者-観出元章-、小書の考案者-金剛右京-、小書のさまざまな変容-、第3日（7/17）小書のさまざまな変容-変化-、小書の現在-質疑。 			A	国民への情報提供とサービスの機会として重要な活動である。芸能部の公開講座を、本年は芸能史研究会と共催したことは新しい試みとして評価できる。一方、夏季学術講座のテーマは継続的観点に立った視野があって始めて生きものであるが、大学院生向けの講座ではあるが、しっかりした継続的展望が望まれる。
	・参加者数	390人 以上	390人 未満 310人 以上	310人 未満	参加者数 607人			A	
	・参加者の満足度	80% 以上	80% 未満 64% 以上	64% 未満	(学術公開講座) 母集団：378人 調査方法：匿名調査 回収数：280 アンケート結果(満足数/回収数)93.9% (オープンレクチャー) 母集団：200人 調査方法：匿名調査 回収数：124 アンケート結果(満足数/回収数)88% (夏季学術講座) 母集団：29人 調査方法：匿名調査 回収数：23 アンケート結果(満足数/回収数)100%			A	
	・公開講演会開催状況	定性的評価を記述し、委員の協			・公開講演会等として第92回公開講演会では、演題「考古学よ			A	積極的に研究成果・調査成果の講

		議により、評定を実施		もやま話一剣と刀」他を第93回公開講演会では、演題「中国北朝の瓦と飛鳥の古瓦」題を実施した。また、飛鳥資料館特別講演会を2回開催し、その他、国際講演会では演題「アジアの考古学シリーズ」と題して実施した。 (参考指標) ・公開講演会開催回数5回		演会・報告会などが実施され、多くの聴衆を大きな満足を与えたことを評価する。	
	・参加者数	350人以上	350人未満 280人以上	280人未満	参加者数 1,283人	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団：1,283人 調査方法：番書調査 回収数：742 アンケート結果（満足数/回収数）96.3%	A	
	・現地説明会開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・発掘調査現地説明会として、「飛鳥藤原第119-5次（川原寺寺城北）発掘調査」他の現地説明会を順次開催し、国民が随時適切に調査研究の成果を入手できるように努めた。 (参考指標) ・現地説明会開催回数8回	A	参加者数及び参加者満足度ともに目標値を達成しており、現地説明会が随行に実施されていることが認められる。
	・参加者数	3,000人以上	3,000人未満 2,400人以上	2,400人未満	参加者数 6,230人	A	
	・参加者満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団：6,230人 調査方法：番書調査 回収数：990 アンケート結果（満足数/回収数）98.1%	A	
エ 調査・研究の成果としてのデータベースを順次公開する。	・データベースの公開状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			(東京文化財研究所) ・インターネットで内部公開データベースをインターネットで外部公開データベースを公開している。またホームページの作成と運用については、当研究所のホームページは広報の場であるとともに、文化財研究のための基礎資料を網羅し、デジタル・アーカイブの有効なメディアとして考案している。なかでも黒田記念館のページでは、記念館が所蔵する黒田清輝の作品の紹介だけでなく、日記・書翰・自筆文献等の基礎資料を提供し、知的データベースとして、より機能と内容の充実に努めた。 (奈良文化財研究所) ・文化財情報の電子化について研究システム改良の検討材料とした。10月には地理情報システム学会大会で成果発表を行った。12月には遺跡GIS研究会、2月には遺跡情報管理検討会を開催した。文化財情報の電子化として、木簡、図書、全文、写真、遺跡、航空写真、軒互等のデータベースにおいて、各種文献や参考書目等の調査を行いながらデータの拡充を行った。写真の電子化も各種の大きさの原画に対して継続して行った。 (参考指標) ・データベース作成件数 7件 ・データベース利用件数 105,919件 ・データベース公開件数 6件 ・ホームページ年間アクセス数 731,587件（前年度比159.2537増）	A	意欲的にデータベースの構築、公開がなされていることは評価できる。
オ 黒田記念館、飛鳥資料館、平城宮跡資料館、飛鳥藤原宮跡発掘調査部展示室における展示・公開を充実させ、入館者数を12年度の実績以上に確保するよう	・黒田記念館展示・公開充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・黒田記念館における作品の展示公開（常設展）は、毎週木曜日と土曜日の午後に行い、10月末から11月初めにかけての1期間は毎日公開した。黒田記念館のパネルレットを作成し、来館者に配布するとともに、10月から1年に図録や絵はがき等を販売するコーナーを設置し、来館者の購入希望に対応できるよ	A	黒田記念館土曜日の公開、バリアフリー化、地方巡回展の開催、絵はがき売場の設置など、公開成果をあげるための努力がはらわれていることは高く評価できる。きめの細かい

努める。

				うに配慮し、さらにエレベーターやリフトを設置して、施設のバリアフリー化を図った。 ・黒田記念館における作品の展示公開（地方巡回展）は、黒田清輝の功績を顕彰し、あわせて地方文化の振興に資するため、昭和52年から開催しており、平成15年度は和歌山県立近代美術館において7月19日から8月31日まで開催し、図録も大幅に改訂した。所蔵作品等の貸出は、静岡県立美術館の「もうひとつの明治美術展」はじめ、4件の展覧会に計13点を貸与した。 (参考指標) ・貸与作品数 4件 (13点)		展示と、広報活動が成功し、魅力的な展示活動が行なわれているが、研究成果の展示という意味では、分かりやすく見せること、楽しみながら見られることを考へて、展示の方法にいつそうの工夫が必要ではないか。また、改修工事は美術館へのサードスペースとして重要であり、評価できる。
・入館者数	3,500人以上	3,500人未満 2,800人以上	2,800人未満	入館者数 13,768人	A	
・入館者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	(常設展) 母集団：10,016人 調査方法：15.9.18～16.3.27の期間抽出調査 回収数：749 アンケート結果(満足数/回収数)98% (巡回展) 母集団：6,261人 調査方法：15.8.18～15.8.31の期間抽出調査 回収数：133 アンケート結果(満足数/回収数)98%	A	
・アンケート結果の展示・公開充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			公開については、多くの入館者から高い評価を得ており、公開日についても昨年途中から土曜日と土曜日に公開している。		
・飛鳥資料館展示・公開充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・通常の常設展のほか、春・秋の特別展2回、企画展1回を開催した。 (特別展) ・「ASUKA 1/500」(平成15年4月22日～6月1日)この展示は、昨年度各地を巡回した「奈良文化財研究所創立50周年記念飛鳥・藤原京展」の精選展で、記念展のために制作した「古代飛鳥の模型」(縮尺5.00分の1)や、山田寺瓦屋根復原模型、キトラ古墳石槨模型などの複製型を中心にしたものである。 ・「古年輪」(平成15年10月7日～11月24日)年輪年代法の最新成果を展示した。年輪年代法の原理、研究史、年代測定機器を紹介し、法隆寺五重塔心柱榑木、法隆寺雲形材木、信楽町宮町遺跡出土柱根、唐招提寺金堂郭瓦、元興寺飛鳥時代帯平などを展示した。 (企画展) ・「重要文化財指定記念展—平城宮跡大跡職鑑定出土木簡と北浦定政関係資料—」(平成16年3月2日～3月14日)平成15年5月の重要文化財指定を記念し、指定品のなから、出土木簡、神武陵などの陵墓関係絵図、平城京復原図、現地調査の野帳「松のおち葉」、復元天平尺などを展示した。 (参考指標) ・公開日数316日 ・展示品貸出数9件	B	入館者数が少ない事をもって業務が十分に行なわれていないとは言えないが、まだ、努力の方向はあると思う。いままじ現状に危機意識をもつことが求められる。飛鳥資料館が、研究所の飛鳥・藤原地域の調査成果を一般の方にわかりやすく示すとともに、この地の出土遺物を顕彰に供し、この地域の歴史とその歴史的意義の正しい理解を促すための施設として不可欠なものであることはいままでもない。飛鳥資料館における飛鳥資料館の意味づけを、もう一度根本的に再検討してみる必要があるのではないか。 飛鳥資料館は、単なる研究所附属博物館ではなく、飛鳥を訪れる人びとに飛鳥・藤原地域の調査・研究の最新の成果を示し、この地の史跡見学の結果をより豊かなものとしてもらうのがその設置目的である。その意味で「古年輪」や「重要文化財指定記念展」などの開催はおいに結構であるが、その内容があまりにも難しく、見学者への配慮も不十分である。特に特別展の「古年輪」は、この世界を理解できるものにとどめて、非に興味をもたせようと思われるが、それは実物を見ることが出来るという意味においてあって、年輪年代法の測定法については、もっと分かりやすい解説が欲しい。
・入館者数	94,000人以上	94,000人未満 75,000人以上	75,000人未満	入館者数 54,149名	C	
・入館者の満足度	80%以上	80%未満	64%未満	母集団：6,310人 調査方法：15.11.1～15.11.22の期間抽出調査	A	

		64%以上		回収数：2,328 アンケート結果(満足数/回収数)95%			た。たとえば、各地方に生息するヒノキの年輪が同じカテゴリーの中で抜えるという事例の紹介などがあるより一層分かりやすく、納得できたとと思われる。
アンケート結果の展示・公開充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			特別展、企画展では適宜を得た展示を順調に実施できた。調査研究の最新の成果を伝える目的は十分に達成できた。			
平城宮跡資料館展示・公開充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> 常設展を過年実施したほか、発掘速報展を開催し、映像関係ではビデオの制作や、新たなシステムの構築をおこなった。 発掘速報展は、「奈良の都を創る-発掘速報展平城2003-」(平成15年11月1日～11月21日)を開催した。この展示は、平成14年度の平城宮跡、平城京跡、寺院跡の発掘成果を速報した。平城宮では、第一次大極院回廊、東区朝興殿院東南部など、平城京では、興福寺中金堂院回廊、一乗院など寺院の調査の紹介が主となった。 遺物では、瓦、土器のほか、特にこれまで知られた平城宮出土の「羅波津の歌」の繁書土器をまとめて展示した。 映像関係では、最新の発掘成果をもちこんだビデオ2本を新たに制作し、合計10本に増強を図った。また、新たにパソコン(6台)による平城宮情報検索システムを作成、設置し、小・中学生にも観しめるようにした。 <p>(参考指標) ・公開日数304日 ・展示品貸出数18件</p>	A	平城宮資料館発掘速報展の開催、解説ビデオの作成など観覧者の理解を深めるための努力が行われたことは評価できる。入館者数が少ないことをもって業務が十分に行われていないとは言えないが、まだ、努力の方向はあると思う。	
入館者数	75,500人以上	75,500未満 60,000人以上	60,000未満	入館者数 73,007名			B
入館者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団：14,932人 調査方法：15.11.1～15.11.22の期間抽出調査 回収数：548 アンケート結果(満足数/回収数)93% (発掘速報展) 母集団：14,134人 調査方法：15.11.1～15.11.22の期間抽出調査 回収数：271 アンケート結果(満足数/回収数)87%			A
アンケート結果の展示・公開充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			調査研究の最新の成果を伝える目的は十分に達成できた。速報性に加えて、正確性などにも留意して、今後、調査研究の進展に即応した更なる充実を図りたい。			
飛鳥藤原宮跡発掘調査部展示室展示・公開充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> 常設展を過年実施したほか、発掘速報展(2件)を実施した。 「田原寺守城北築の発掘調査速報展示」(平成15年10月27日～年末)では、平成14年7～12月の調査により出土した鉄釜群型、埴土坑などを展示し、あわせて「古代飛鳥の模型」も展示した。「石神遺跡発掘調査(飛鳥藤原第129次)の成果速報展示」(平成16年1月21日(水)から約2ヶ月間)では、平成15年7～12月の調査で出土した木簡類を中心に紹介した。 <p>(参考指標) ・公開日数243日 ・展示品貸出数17件</p>	A	展示室の広報活動次第では、さらに入館者が増えるなど、活性化することが期待できるのではないかとと思われる。一層の検討を望みたい。	
入館者数	3,400人以上	3,400未満 2,700人以上	2,700未満	入館者数 4,091名			A
入館者の満足度	80%	80%	64%	母集団：241人			A

		以上	未満 64% 以上	未満	調査方法：15. 11. 1～15. 11. 22の期間抽出調査 回収数：47 アンケート結果（満足数/回収数）91% （発掘速報展開催時にアンケート調査実施）		
	・アンケート結果の展示・公開充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			調査研究の最新の成果を伝える目的は十分に達成できた。連続性に加えて、正確性などにも留意して、今後、調査研究の進展に応じた更なる充実を図りたい。		
力	研究成果の公表の結果に関して、適宜アンケート調査等を実施し、常に国民の評価を得るよう努める。	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			（東京文化財研究所） ・各研究プロジェクトにおいては、研究結果を確認し、プロジェクトを発展させるため、アンケート調査を実施した。①国際研修 漆の保存と修復②文化財の保存・修復に関する国際研究集会③第12回アジア文化財保存セミナー④第14回国際文化財保存修復研究会⑤第15回国際文化財保存修復研究会⑥芸術部公開学術講座⑦美術部オーブンレクチャー⑧芸術部夏期学術講座⑨黒田記念館における作品の展示公開 常設展⑩黒田記念館における作品の展示公開 地方巡回展・所蔵作品の貸与⑪民俗芸術研究協議会⑫文化財保存修復研究協議会⑬近代文化遺産の保存修復に関する研究会⑭在外日本古美術品保存修復技術研究会⑮博物館・美術館等の保存担当学芸員研修⑯平成15年度博物館実習 （奈良文化財研究所） ・発掘調査現地説明会、公開講演会、研究集会、発掘速報展等の事業に際してアンケートをおこなった。発掘調査現地説明会は、平城宮関係4回、飛鳥寺原宮関係3回、公開講演会8回、研究集会2回、発掘速報展1回、企画展1回に際してアンケートをおこなった。アンケートの結果では、いずれも満足度は高く、国民の評価を得た。また、アンケート対象事業に対して有益な意見が寄せられた。	A	積極的にアンケートが実施されていることは評価できるが、まだ全体的に回収率が少ないように思う。アンケートを書かなかつた理由や、不満を表明したアンケートの内容などを勘案してアンケートの成果をより積極的に生かすためにも、その内容について一層の工夫が求められる。
	・アンケート調査等実施回数	14回以上	14回未満 11回以上	11回未満	アンケート調査等実施回数 35回	A	
	・国民の評価（満足度）	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	（東京文化財研究所） ①国際研修 漆の保存と修復 母集団：10人 調査方法：悉皆調査 回収数：10 アンケート結果（満足数/回収数）82% ②文化財の保存・修復に関する国際研究集会 母集団：219人 調査方法：悉皆調査 回収数：118 アンケート結果（満足数/回収数）98% ③第12回アジア文化財保存セミナー 母集団：15人 調査方法：悉皆調査 回収数：8 アンケート結果（満足数/回収数）100% ④第14回国際文化財保存修復研究会 母集団：106人 調査方法：悉皆調査 回収数：40 アンケート結果（満足数/回収数）97% ⑤第15回国際文化財保存修復研究会 母集団：86人 調査方法：悉皆調査 回収数：37 アンケート結果（満足数/回収数）97% ⑥芸術部公開学術講座 母集団：378人	A	

調査方法：悉皆調査
回収数：280
アンケート結果（満足数/回収数）93.9%
⑦美術部オープンレクチャー
母集団：200人
調査方法：悉皆調査
回収数：124
アンケート結果（満足数/回収数）88%
⑧芸能部夏期学術講座
母集団：29人
調査方法：悉皆調査
回収数：23
アンケート結果（満足数/回収数）100%
⑨黒田記念館における作品の展示公開 常設展
母集団：10,016人
調査方法：15.9.18～16.3.27の期間抽出調査
回収数：749
アンケート結果（満足数/回収数）98%
⑩黒田記念館における作品の展示公開 地方巡回展・所蔵作品の貸与
母集団：6,261人
調査方法：15.8.18～15.8.31期間抽出調査
回収数：133
アンケート結果（満足数/回収数）98%
⑪民俗芸能研究協議会
母集団：94人
調査方法：悉皆調査
回収数：49
アンケート結果（満足数/回収数）100%
⑫文化財保存修復研究協議会
母集団：80人
調査方法：悉皆調査
回収数：16
アンケート結果（満足数/回収数）100%
⑬近代の文化遺産の保存修復に関する研究会
母集団：162人
調査方法：悉皆調査
回収数：112
アンケート結果（満足数/回収数）88.4%
⑭在外日本古美術品保存修復技術研究会
母集団：15人
調査方法：悉皆調査
回収数：12
アンケート結果（満足数/回収数）91.7%
⑮博物館・美術館等の保存担当学芸員研修
母集団：30人
調査方法：悉皆調査
回収数：30
アンケート結果（満足数/回収数）100%
⑯平成15年度博物館実習
母集団：11人
調査方法：悉皆調査
回収数：11
アンケート結果（満足数/回収数）84.8%
（奈良文化財研究所）
（発掘調査現地説明会）
⑰平城宮東区朝興院東南部
母集団：390人
調査方法：悉皆調査
回収数：87
アンケート結果（満足数/回収数）98.9%
⑱藤原宮朝堂院東南隅
母集団：1,030人
調査方法：悉皆調査
回収数：158
アンケート結果（満足数/回収数）98.2%

③平常宮第一次大極殿院南面築地回廊
 母集団：400人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：183
 アンケート結果（満足数/回収数）96.8%

④名勝旧大業院庭園
 母集団：363人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：150
 アンケート結果（満足数/回収数）98.7%

⑤石神遺跡第16次
 母集団：600人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：157
 アンケート結果（満足数/回収数）96.9%

⑥藤原宮朝堂院東第三堂
 母集団：395人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：67
 アンケート結果（満足数/回収数）98.6%

⑦平城宮中央区朝堂院朝延
 母集団：1,051人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：188
 アンケート結果（満足数/回収数）99.5%

（公開講演会等）

①第92回公開講演会
 母集団：310人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：189
 アンケート結果（満足数/回収数）96.9%

②第93回公開講演会
 母集団：142人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：62
 アンケート結果（満足数/回収数）96.8%

③飛鳥資料館特別講演会
 母集団：98人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：75
 アンケート結果（満足数/回収数）100%

④飛鳥資料館特別講演会
 母集団：139人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：109
 アンケート結果（満足数/回収数）98.2%

⑤国際講演会
 第1回
 母集団：234人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：131
 アンケート結果（満足数/回収数）93.9%

第2回
 母集団：157人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：70
 アンケート結果（満足数/回収数）97.2%

第3回
 母集団：203人
 調査方法：懸賞調査
 回収数：106
 アンケート結果（満足数/回収数）93.4%

第4回
 母集団：142人

					<p>調査方法：匿名調査 回収数：62 アンケート結果（満足数/回収数）80.7%</p> <p>（研究集会） ①「古代官衙・集落研究会－駅家と在地社会－」 母集団：143人 調査方法：匿名調査 回収数：105 アンケート結果（満足数/回収数）96.2%</p> <p>②「保存科学研究集会－日中における古代壁画の保存修復－」 母集団：124人 調査方法：匿名調査 回収数：34 アンケート結果（満足数/回収数）97.1%</p> <p>（発掘速報展、企画展） ①「奈良の都を撮る－発掘速報展平成2003－」 母集団：14,134人 調査方法：匿名調査 回収数：271 アンケート結果（満足数/回収数）88.2%</p> <p>②「重要文化財指定記念展－平城宮跡推定大膳職出土木簡と北浦定成関係資料－」 母集団：1,611人 調査方法：匿名調査 回収数：746 アンケート結果（満足数/回収数）94.0%</p>		
	アンケート結果の研究発表充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			参加者数は、従来の水準を維持し、順調に実現できた。今後もこのペースを維持しつつ調査研究の成果に基づき講演等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者のニーズの把握等に力を注ぎ参加者の満足度の向上に努める。		
2-②	<p>開催状況</p> <p>以下の協議会等を開催し、研究成果の向上を図る。 ア 民俗芸能研究協議会</p>	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			平成15年度の民俗芸能研究協議会は、11月20日に当研究所セミナー室において、「民俗芸能に関する情報の発信と共有」をテーマに、民間・行政それぞれの立場でユニークな民俗芸能に関する情報発信を行っている個人・団体4件による以下の事例報告と、コメントカードを交えた総合討議を実施し、その成果を報告書として刊行した。	A	テーマ自体は時宜を得たものであったが、時間の割に内容が総花的になり過ぎたきらいがある。
	参加者数	90人以上	90人未満 70人以上	70人未満	参加者数 94人	A	
	参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団：94人 調査方法：匿名調査 回収数：49 アンケート結果（満足数/回収数）100%	A	
イ	文化財保存修復研究協議会	開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施		この研究協議会は、保存調査手法や修復技術など保存と修復に係わる今日的テーマについて、外部に広く知ってもらうために発表および討論の場を設けてきた。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交替で担当しているが、平成15年度は、保存科学部が担当した。今回の研究協議会は、「古墳や祠境内の水分の影響と保存対策」というテーマで行い、日本の高松塚古墳、王塚古墳、フランスのラスコー洞窟、韓国、武寧王陵などの保存環境の問題点、対応策などを協議するため、フランスの歴史記念物研究所、韓国の公州大学から専門家を招聘して開催した。	A	高松塚・キトラ古墳の壁画の保存が問題になっている現状からも、こうした国際的な協議会の開催は高く評価できる。アンケートの回収率を上げることがを望む。
					(参考指標)		

					・調査・研究報告書等刊行数 1件		
	・参加者数	50人以上	50人未満 40人以上	40人未満	参加者数 80人	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団: 80人 調査方法: 匿名調査 回収数: 16 アンケート結果(満足数/回収数) 100%	A	
ウ 近代の文化遺産の保存研究会	・開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・今年度、ドイツ・イギリス・スイスの鉄道関係の専門家を招聘し、鉄道車両および鉄道関連施設の保存と活用に関する研究会を行った。第12回「鉄道周辺施設の保存修復と活用」(2003.8.27)第13回「鉄道周辺施設の保存修復と活用～ヨーロッパにおける事例」(2003.10.24)第14回「ヨーロッパ鉄道博物館における文化財保存修復の意義」(2004.2.10) (参考指標) ・発表件数 2件 ・調査・研究報告書等刊行数 2件	A	近代化遺産の保存・活用策を探る上からも、こうした協議会の開催は評価できる。
	・参加者数	50人以上	50人未満 40人以上	40人未満	参加者数 162人	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団: 162人 調査方法: 匿名調査 回収数: 112 アンケート結果(満足数/回収数) 88.4%	A	
エ 保存科学研究集会	・開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・古代中国壁画の保存修復に携わる専門家を招聘し、「日中における古代壁画の保存修復」をテーマに、古代顔料の分析などの自然科学的な調査から様々な状況での保存修復技術などを取り上げて、講演会形式で保存科学研究集会を開催した。壁画に限らず、不動産文化財の保存修復に対する考え方などについて意見を交換できたことはきわめて有意義であった。	A	高松塚・キトラ古墳の壁画の保存が問題になっている現状からも、こうした日・中の国際的な研究交流は高く評価できる。アンケートの回収率を上げることを窺む。
	・参加者数	100人以上	100人未満 80人以上	80人未満	参加者数 124人	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団: 124人 調査方法: 匿名調査 回収数: 34 アンケート結果(満足数/回収数) 97%	A	
オ 在外日本古美術品修復技術研究会	・開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・今年度は、輸出漆器などに使用されている銀製金具の劣化について研究会を行った。金具の表面に起こる錆化は、放置しておくとう蝕部分の損傷につながるために、伝統的な表面処理として錆化する以前に人工的に錆をつける「色上げ」を行った。今回は、3種類の薬液で銀の表面に色上げを行った。(2003.8.8)	A	中期計画に基づき編纂に開催されているものとして、十分に評価できる。
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団: 15人 調査方法: 匿名調査 回収数: 12 アンケート結果(満足数/回収数) 91.7%	A	
3 文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供	・資料・図書収集・整理・公開・提供状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			(東京文化財研究所) ・国際文化財保存修復協力センター国際資料室の整備・公開・活	A	積極的に関係資料の収集がはかられ、かつその公開のための努力が行

3-①
ア 毎年、前年度実績を上回るよう文化財関係の資料・図書の収集・整理・公開・提供を充実する。

用プロジェクトは、外国の文化財や文化財保存の現状および理念、文化財保存関連機関、文化財保護制度、日本および国外の文化財保護関連法令、文化論等の分野の書籍・資料を購入し、資料室の充実を図った。また、千原大五郎氏旧蔵資料の受け入れと整理、野口英雄氏資料の受入を行った。さらに、文化財保護関連法令資料を収集・整理した。受入資料のデータベース化を行い、今年度入力が見了した。600点余りのデータは「国際資料室所蔵資料目録」として出版した。

・研究所が所蔵する文化財関係資料のなかで、情報調整室が管理する各種図書資料・写真資料等は、資料閲覧室にて文化財関係研究者・大学院生をはじめ一般へ、原則として祝日・年末年始を除く、毎週月・水・金に閲覧に供している。また公開可能なデータは閲覧室においてインターネット上の運用評価を踏まえて、インターネットを通して外部に提供している。図書・雑誌・展覧会カタログ等の目録データは、5年計画のもとで、適宜、原本照合を進め、冊子体の目録発行を行い、閲覧室で利用者の検索用に提供している。

(奈良文化財研究所)

・文化財関係資料・図書の収集・整理・公開・提供として、遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等、歴史・考古学分野を中心とした図書・史料刊行物の収集、整理並びに発掘調査関係の遺跡、建造物、図録等の写真の収集・整理を行なった。そして、所内外の利用者の図書利用の一層の便宜を図るために、所蔵図書データベースをホームページで公開し、インターネット経由により24時間いつでも所蔵資料を確認することが出来るようにした。

われていることは、高く評価できる。当研究所しか研究機関がない分野においては、網羅的・悉般的に収集し、公開する事を目標に寄贈資料も積極的な受入を望みたい。

(参考指標)

- ・目録所在情報公開件数 635,901件
- ・目録所在情報収録件数 842,865件

資料・図書の受入数	11,000件以上	11,000件未満 8,800件以上	8,800件未満	32,960件	A
目録所在情報作成件数	11,000件以上	11,000件未満 8,800件以上	8,800件未満	目録の作成件数 264,446件	A
資料閲覧室等の利用者数	380人以上	380人未満 300人以上	300人未満	外部利用者 800人	A

イ これまでの実績や蓄積したデータを活用し、文化財関係資料等に關するデータベースの作成を継続・充実し、順次公開する。

・データベースの充実及び公開状況

定性の評価を記述し、委員の協議により、評定を実施

・伝統芸能の画像・音声・映像資料のデジタル化では、今年度、音源劣化の防止を最優先して、オープンリールテープのCD化として声明、寺事、歌舞伎、浄瑠璃、民俗芸能等を中心に、303枚のCDを作成した。歌舞伎・浄瑠璃に関しては、昭和30年代の音源を中心に、近代の無形文化財の伝承を考える上で貴重な音声資料のデジタル化を進めた。このほか、歌舞伎・文楽を中心に、138枚のDVDを登録した。

・文化財保存に関する図録情報の収集及び研究データベースの作成、公開一では、東南アジア地域で実施中の調査研究について現地で位置情報・画像情報を取得し、データベース化した。昨年度受け入れた千原大五郎氏旧蔵資料のうち、修復現場の写真や図面等の整理・データベース化を行い、「千原大五郎資料目録(写真・論文・図面編)」を出版した。また、野口英雄氏がエッセイ勤務時に収集した211点の資料を受け入れた。世界遺産会議などへの出席、および外国の文化財保護関連機関での聞き取り調査により、情報収集を行った。

オープンリールがCD化されることは、劣化を超える意味では大事なことと思われ、より一層継続を望む。また、積極的にデータベースの充実がはかられ、かつその公開のための努力が行われていることは高く評価できる。さらに多くのデータベースの構築と公開を望みたい。

(参考指標)

- ・目録配布部数 200部

	データベース作成数	17種類以上	17種類未満 13種類以上	13種類未満	データベース作成数 20種類	A	
3-② 文化財情報の電子化及びシステムの構築に関する研究の成果を活かし文化財情報基地としての基盤を整備・充実する。それにより、国民に対して円滑な情報提供を行う。また、両研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を毎年度平均で12年度実績以上を確保する。	<ul style="list-style-type: none"> 研究実施状況 文化財情報基盤の整備・充実状況 情報提供実施状況 ホームページ充実状況 	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<p>(東京文化財研究所)</p> <ul style="list-style-type: none"> 画像資料の作成・整理については、データ管理の基本であった既存の写真原板台帳に代わるべく、すでに画像データベース(写真管理検索システム)を構築し、試験的に運用している。今年度は、写真原板台帳から複写を作成してデータベースへの登録画像を作成し、カラーポジ、モノクロフィルムのデータを入力した。 画像情報室では、各研究部門の要請にしたがって、文化財の研究に必要な画像を形成している。とくにフルカラー化、デジタル化を押し進めていくために、最先端の技術革新に即応できるような設備等を整備した。 東京文化財研究所のネットワークシステムは、平成12年度に導入し、順調に稼働している。各部・センターから選出された委員とともにAG委員会を構成し、新規メールアドレスの所得やシステム全体の日常的な運用・中長期的な更新計画、保守契約等について協議し、実践している。計画年度3年目は、4年目以降のシステム環境の効率化を目指し、システム環境の見直しを開始した。 (奈良文化財研究所) 情報基盤の整備として、所内ネットワーク機器の一部を更新し、所外および平城地区、飛鳥塚地区、飛鳥資料館の各地区間についても、5Mbpsから10Mbpsへの増強を行い、所内ネットワーク環境の改善を図った。独立行政法人文化財研究所のホームページにおいても法人情報提供のため、継続的に中期目標、中期計画、規程等の情報提供を行った。 <p>(参考指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 画像撮影件数 2,934件 	A	ホームページ等による情報の発信はますます、アクセス件数が多いこともは大事なことであり評価する。今後、さらにホームページの内容が充実することを期待したい。
	ホームページアクセス件数	360,000件以上	360,000件未満 288,000件以上	288,000件未満	ホームページアクセス件数 896,158件	A	
4 文化財に関する研修等 4-① ア 埋蔵文化財発掘技術者等研修年14回(種類)、のべ200名程度に対し研修を実施する。	研修の内容・方法の適切性	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<ul style="list-style-type: none"> 遺跡の発掘調査や保存・整備等に関し、必要な知識と技術の研鑽を図るため、地方公共団体等の埋蔵文化財保護行政を担当する者を対象として、本年度は、一般研修1課程、専門研修8課程、特別研修5課程の計14課程の研修を実施し、延べ245名が受講した。研修受講者全員にアンケート調査を実施し、全員から「有意義だった」「役に立った」との回答を得ているが、研修企画委員会を開催し、アンケートの回答内容を分析するなどして、更なる研修内容の充実を図っていく予定である。 	A	奈良文化財研究所の埋蔵文化財発掘技術者等研修会は、日本の埋蔵文化財調査水準の向上に大きな役割を果たしている。今後は、地方公共団体やそれが設立した法人ばかりでなく、民間機関が調査を担当することが多くなると予想されることから、民間の調査機関の担当者をもその対象に組み込むべきであろう。
	研修実施回数	14回以上	14回未満 11回以上	11回未満	研修実施回数 14回	A	
	受講者数	200人以上	200人未満 160人以上	160人未満	受講者数 245人	A	
	受講者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	母集団：245人 調査方法：匿名調査 回収数：239 アンケート結果(満足数/回収数)100%	A	

	・アンケート結果の研修内容・方法への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	研修企画委員会を開催し、アンケート結果を含む前回実施した研修結果を分析し、研修内容・方法の充実に反させている。	A		
	・受講生の再教育等フォローアップ状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	発掘調査経験の浅い者向けの一般研修及びその終了者を対象とした専門研修・特別研修を各種開講し再教育に対応している。	A		
イ	博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 年1回、2.5名程度に対して研修を実施する。	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	<p>・博物館・美術館等の保存担当学芸員研修を、本年度は、7月8日から18日まで2回開催した。研修参加者は、3名であった。研修では、保存環境に関しては、総論、文化財材質の材質、湿度などの各論の講義を行った。また、生物被害に関しては、総論、各論の生物防除、劣化と保存に関しては、各論の紙、木造品、などの講義を行った。また保存科学実習に関しては、湿度測定機器の取り扱い、生物被害の実習に関しては、文化財害虫同定、殺虫処理などを行った。さらに、過去の受講生に、保存に関する最新の情報を伝えるために、フォローアップ研修を、1回、地域研修を3回（高知市立自由民権記念館、福井県立歴史博物館、鹿児島県歴史資料センター黎明館）開催し、好評を得た。</p>	A	保存に関する研修は、他の機関ではできない分野であり、多くの美術館・博物館がそのような知識を持った担当学芸員が増加することは望ましい。日本の博物館・美術館の資料保存水準の向上に大きな役割を果たしていることは高く評価される。	
	・研修実施回数	1回以上	0回	研修実施回数	1回	A
	・受講者数	2.5人 2.5人未満 2.2人以上	2.2人 未満	受講者数	3.0人	A
	・受講者の満足度	8.0% 8.0%未満 6.4%以上	6.4% 未満	母集団：3.0人 調査方法：匿名調査 回収数：3.0 アンケート結果（満足数/回収数）100%		A
	・アンケート結果の研修内容・方法への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	講義、実習の内容、形式についてのアンケート結果を検討し、平成16年度の研修に反映させる。			
	・受講生の再教育等フォローアップ状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	既受講者に対するフォローアップ研修を6月に実施し、保存に関する最新の情報を講義した。参加者数は5.8名。	A		
4-②	・連携大学院教育実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	（東京文化財研究所） ・東京芸術大学の連携大学院教育 東京芸術大学大学院美術研究文化財保存学専攻システム保存学領域（保存環境学、修復材料学）を6名の教官（教授4名、助教2名）で担当。修士課程および博士課程（各学年2名の定員枠）で大学院生を指導するとともに、文化財保存専攻の大学院生を対象に、次の講義と演習を担当した。 文化財保存学演習、保存環境計画論、保存環境学特論、保存環境学演習、修復計画論、修復材料学特論、 平成15年度は、5名の大学院生（保存環境学3名、修復材料学2名）が在籍した。 （奈良文化財研究所） ・京都大学との連携大学院教育 大学院人間文化研究科において6名の教官で担当。修士課程及び博士課程で次の講義を実施した。 文化財調査法論1、文化財調査法論2、環境考古学論1、環境考古学論2、文化遺産学演習1、文化遺産学演習2 平成15年度の受け入れ学生は、修士課程4名、博士課程5名であった。 ・奈良女子大学との連携大学院教育 大学院人間文化研究科において、3名の教官で担当。博士課程で次の講義を実施した。 宗教考古学特論、歴史考古学特論、歴史資料論 平成15年度の受講生数は、1.3名であった。	A	文化財研究所のすぐれた研究成果やそのノウハウを研究者養成に役立てることは大きな意義がある。しかしながら、相当の負担を負う研究者がいること、就職など現実の成果を検証し、今後のあり方を文化財研究所と大学が検討することは必要であろう。	
ア	東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との間の連携大学院教育を推進する。					
	・受入学生数	6人以上	6人未満	4人未満	受入学生数	A

<p>イ 東京と奈良において各々年間10名程度の博物館学実習生を受入れを行う。</p>	<p>博物館学実習生受入状況</p>	<p>4人以上</p>	<p>22人</p> <p>(東京文化財研究所) ・東京文化財研究所では、11名を対象に、9月8日から13日まで、日本の近代現代美術資料の収集・作成と研究、光学的手法による調査研究、情報処理技術、文化財の保存と修復などをテーマとして実習を行った。 ・今年度は平成15年9月1日から5日まで、博物館学実習を実施し、博物館学実習の単位を認定した。講義内容では、研究所概説・飛鳥資料館概説、展示の実態(企画構成から展示まで)、展示品の借用の実態、博物館展示の新傾向、博物館のIT化、新しい博物館学構築に向けて、博物館と建築、展示解説の実態を講義項目とした。</p>	<p>B</p>	<p>文化財研究所が博物館学実習生を受け入れることは、学生にとっては大きな魅力であるが、研究所が博物館や美術館と同様に博物館実習の学生を受け入れる意義については、見直すことが必要と思われる。なお、アンケート調査は全員を対象とすべきであろう。</p>
	<p>・実習生数</p>	<p>20人 以上</p>	<p>20人未満 16人以上</p> <p>16人 未満</p> <p>実習生数 17名</p>	<p>B</p>	
	<p>・実習生の満足度</p>	<p>80% 以上</p>	<p>80%未満 64%以上</p> <p>64% 未満</p> <p>母集団：11人 調査方法：抽出調査(東京のみ) 回収数：11 アンケート結果(満足数/回収数)84.8%</p>	<p>A</p>	
<p>5 文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する援助・助言</p> <p>5-① 文化庁が行う平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に対する専門的・技術的な援助・助言</p>	<p>・援助・助言の実施状況</p>	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>(奈良文化財研究所) ・平城宮跡第一次大規模正殿の復原施工に当たって、これまでに奈良文化財研究所が蓄積してきた資料・研究成果によって大規模の詳細設計・施工などについて、連絡会議・ワーキンググループ会議などを通じて指導・助言し、新たに行うべき調査研究をも企画した。また、文化庁記念物課が(財)文化財建造物保存技術協会上で発注した「第一次大規模院地区整備方針」案作成について、資料提供・指導を行った。 ・平城宮跡の整備については、文化庁記念物課へ各種の提案をし、記念物課主催の委員会に計9回、同課との連絡会議計12回、施設ワーキンググループ会議計12回に参加し、文部科学省施設部公設工事事務所に対して計78回の設計指導・援助、計24回の現地立ち会い・指導助言等を行った。藤原宮跡の整備については、整備基本計画策定に関する援助・助言を行った。(共同事業) ・キトラ古墳及び高松塚古墳壁画の調査及び保存・括用に関する技術的助言をそれぞれ実施した。 ・キトラ古墳：墓道部未掘部分を発掘し、墓道の断面の壁画の保存に関する調査・対策を立案し、現場調査、環境調査、微生物対策、応急処置保存の検査等をおこなった。埋土調査、高松塚古墳：墳指定地・史跡指定地・周囲の排水溝工事に伴う立会調査(平成15年5月28日～10月5日)を実施した。石室内部の湿度及び水分分布調査、微生物対策等をおこなった。 (受託事業) ・特別史跡キトラ古墳墓道部発掘調査業務及び壁画保存業務では、墓道部未掘部分を発掘し、空堀坑は、盗掘された石室材の断片の他、漆塗木棺片や、金一具片が出土した。墓道では、柱穴2つを掘出し、石室前部の土壌状況も明らかとなり、高松</p>	<p>A</p>	<p>研究所が文化庁の行う各種の事業に専門的・技術的な援助を行うことは、その設置目的からも当然であり、この面で研究所が大きな役割を果たしていることは高く評価できる。</p>

			<p>ど他の終末期古墳の石室とは、細部で異なる点のあることが判明した。壁面の保存に関しては、1.環境調査として、観測ステーションを設置し測定を開始した。2.微生物対策として、空気清浄機を用いて浮遊菌の数を減らすようにした。3.応急処置の検討を行った。【文化庁】</p>	
	・援助・助言実施件数	40件	現地調査、会議出席等の件数	A
		40件未満	182件	
		32件		
		以上		
		32件未満		
		以上		
5-②	・援助・助言の実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	<p>(東京文化財研究所)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化財の材質に関する調査と援助・助言として、様々な文化財資料について、その材料や彩色を化学的手法および物理的手法を用いて調査した。化学的手法として、蛍光X線分析法(微塵型、可搬型)、ICP分析法などによる化学組成の測定、X線回折分析法による化学的構造の測定を行った。平成15年度の化学的手法による調査件数は21件、約150試料であった。また、物理的手法として、X線透過撮影、エッセイグラフラーによる文化財の構造調査を実施した。平成15年度の物理的手法による調査件数は12件、30試料であった。 ・今年度、地方公共団体等からの依頼に基づいて、国宝・重要文化財を含む文化財修復に関する29件の指導・助言を行った。 ・無形の文化財の保存・伝承・活用等に関する調査・助言における平成15年度は、「文部科学省教育映画等審査に関する助言(11件)」「講座記録作成事業に関する調査・助言(10件)」「全国民俗芸能大会に関する調査・助言(5件)」等、各種委員会等での助言を中心に、61件の調査助言を行った。(奈良文化財研究所) ・地方公共団体等が行っている文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業に対し、依頼を受け専門委員会の委員になるなどして、空跡聖蹟、建造物修理、発掘調査、出土文字資料調査等の各分野において専門的・技術的な援助・助言を行っている。地方公共団体等の委員就任件数166件 援助・助言実施件数(出張依頼を受けた件数)360件 ・個人もしくは民間の発掘行為に伴う平城京域発掘調査への援助・助言として、平成15年4月から翌年3月まで延べ148日間、平城宮に密接に関連する法華寺・興福寺・龍興寺など10カ所を発掘調査した。特に法華寺境内と薬師寺境内は、300㎡前後の発掘面積に及び、前者では伽藍中軸線を対象に配置された6棟の建物配置とその変遷を把握して、創建前後の様相解明を進めた。 ・地方公共団体等が行う飛鳥・藤原京域発掘調査への援助・助言で今年度は、藤原宮・京内3件、飛鳥地域6件の調査をおこなった。総面積約780㎡、期間は約5ヶ月となる。藤原宮内では、南辺外周部、東方官衙北地区などで成果があった。飛鳥地域では、田原寺等寺域方の調査が特筆される。ここでは、寺域の北面大垣を検出した他、その南が7世紀後半から平安時代におよぶ寺院付属の工房跡であることがあきらかとなった。このように小規模調査ながら大きな成果をあげることができた。 ・平成16年度にドイツで開催される「日本の考古学—曙光の時代」展について、主催者の一人である文化庁美術学芸課から依頼を受け、今年度以展示品の確定、全列品の新たな撮影(約15000カット)、遺構復原等の文化庁・国庫の鑑定と借用依頼の事務を行い、展示図録の編集・執筆とパネル・キャプション等の執筆(旧石器時代から古代までA4で計240枚のワープロ打ち)、パネル・図録に使うイラストの指導を行った。(受託事業) ・安芸国分寺跡出土木簡について、保存処理として、1点ごとにその木質の詳細な状況の検討を行い、1方を期して行い、その結果木材加工跡も十分に観察し得る良好な仕上がりを得た。また、保存処理後の写真撮影では、4×5判可視光白黒・カラ 	A

				<p>一、及び赤外線デジタル写真の撮影を行った。保存処理後に全点を再度観察・検討した結果、新たな釈文を得ることができた。特に、「葬白」という書札札にかなった書き出しを見いだしたことは地方社会における文書文化普及の状況を検討する上できわめて貴重な発見である。【財団法人東広島市教育文化振興事業団】</p> <p>・法華寺現境内における防犯施設敷設工事および護摩堂建設に先立って、現状変更ともなう事前の発掘調査を行った。主な成果としては、奈良時代には講堂の北側にあたる現本堂周りに6棟の東西建物が展開していたことが明らかとなった。これらの建物は、当初は竪立柱建物であったが、さほど時間を経ずに礎石建物へと建て替えられている。また、現南門周辺の調査では法華寺講堂の基礎を初めて検出した。今回の調査でこれまで不鮮明であった現境内地における法華寺の個態配置の全容を明らかにした点や、竪立柱建物から礎石建物への移行を確認した点など、不詳等に始まる当地の土地利用の変遷を知る上で重要な成果をおけることができた。【宗教法人光明宗法華寺】</p> <p>・今回の薬師寺の発掘調査地は薬師寺西面回廊の西に当たった。河川改修に伴い、細長い調査区を設定せざるを得なかったため、面的に建物を検出するというよりも、回廊外側の土地利用の変遷を把握することに主眼を置いた。遺構は、南北方向に流れる近世の溝、石組、近世の井戸2基、土坑などを検出した。これらの遺構は鎌倉時代の整地層に掘りこまれており、整地層は調査区のはほぼ全体に厚く堆積しており、大量の瓦、土器、焼土、炭を含んでいる。これらのことから、回廊外側は鎌倉時代以降も溝や井戸が掘削され、遺構の密度は高く、長期間に渡って盛んに土地利用が行われていたことが判明した。【奈良市】</p> <p>・高屋原神社宮東口停車場飛鳥の改良工事に伴う発掘調査である。平成11年度に今回の調査の東隣地帯を調査した際、東から西へ流れる幅約2m、深さ0.4mの流路を検出している。調査の結果、今回の調査区は丁度この流路の中に位置していたことが判明し、現在の道路に平行する形で、東西方向の流路がのびていることが確認できた。【奈良県桜井土木事務所】</p>			
	・援助・助言実施件数	410件 以上	410件 未満 330件 以上	330件 未満	委員就任、現地調査、会議出席、文書発行、電話等件数635件	A	
5-③ 地方公共団体等が設置する文化財の収蔵・公開施設に対する専門的・技術的な援助・助言	・援助・助言の実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<p>・博物館・美術館等の環境調査指導と援助・助言として本年度は、国宝・重要文化財などの指定品および東京国立博物館収蔵資料の借用に関して随内環境調査を行い、24館に対して報告書を作成・提出した。現地調査は土浦市立博物館、川越市お祭り会館他、15館を行った。また、全国140館の新設設の美術館・博物館等文化財展示収蔵施設に対して環境改善に関する相談を受け、助言を行った。文化財の虫歯害に対する調査指導としては、文化財の虫・カビ等の被害への対応について問い合わせを受け、指導・助言を行った。</p>	A	<p>・研究所が地方公共団体が設置する博物館等の保存環境の調査や資料保存法について調査を行うことは、その設置目的からも当然であり、この面で研究所が大きな役割を果たしていることは高く評価できる。</p>
	・援助・助言実施件数	170件 以上	170件 未満 140件 以上	140件 未満	援助・助言件数 217件	A	
6 前各項の業務に附帯する業務6-(1) 平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の 公開・活用事業への協力・積極的支援を実施する。また、文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に積極的に協力する。	・協力・支援状況 ・維持管理実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			<p>・文化庁の要請により運営費交付金に措置された予算で、文化庁所属の国営である特別史跡平城宮跡及び特別史跡藤原宮跡、また失雀門や東院御霊並及び付属施設において遺構、美化管理、駐車管理等の公開活用支援事業を実施した。事業は、広範囲かつ多岐に渡る業務であり、市民や観光客等利用者が多く中での実施であったが、特に問題となる事態が発生することもなく、利用環境及び日常管理を適切に遂行できたと考えている。</p> <p>・特別史跡平城宮跡内に文化庁平城宮跡等管理事務所が設置されており、施設の公開、各種行事、付属施設等の修繕などにおける文化庁との連絡調整等の業務を行っている。管理事務所の運</p>	A	この面で研究所が努力していることは高く評価できる。

					宮に関しては、研究所が積極的な協力を行うこととしており、各種行事や発掘調査等に係る連絡調整、宮跡内建物や工作物等の修繕に当たっての状況の把握や文化庁・業者との連絡調整や現場監理、住民等からの苦情対応、各種消防署との連絡調整、放棄車両・ホームレス対策のための警察等との打合せ等を実施した。		
6-② ①解説ボランティア事業を運営する。	・ボランティア活動状況	定期的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・平城宮跡を訪れた約7万5千余人に案内・解説。平城宮跡は小・中学校の校外学習の場としても活用され、解説ボランティアに依頼されることが多く、学校関係者等から高い評価を得ている。解説ボランティアの活動支援として、解説のための専門研修、城日本紀読書会、ガイド英語研究会の学習会を開催し、平城宮跡ガイドフレーズと平城宮跡解説案内、(英文・和文)を発行している。また、遺跡見学会、発掘調査現地説明会(随時)、講演会、平城宮跡スタンプラリー、ボランティア交流会等を実施、解説資料の配布を行うなど積極的に支援した。(解説ボランティア126名。)来訪者にアンケート調査をおこなった結果、93%がよかったと答えている。	A	平城宮の見学者に対する解説ボランティアが大きな役割を果たしている。その運営や研修事業は適切に実施されており、高く評価できる。
	・ボランティア登録者数	100人 以上	100人 未満 80人 以上	80人 未満	ボランティア登録者数 126名	A	
	・事業参加者数	45,000人 以上	45,000人 未満 36,000人 以上	36,000人 未満	ボランティア事業への参加者数 74,208名	A	
	・参加者の満足度	80% 以上	80% 未満 64% 以上	64% 未満	母集団：14,932人 調査方法：15、11、2～15、11、22の期間抽出調査 回収数：548 アンケート結果(満足数/回収数)93%	A	
②各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供、文化財に関する学習会の実施等の支援を行う。	・ボランティア支援状況	定期的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・各種ボランティアに対する学習会等を実施した。特定非営利活動法人なら・観光ボランティアガイドの会に朱雀 門、東院庭園でのボランティア解説の活動場所の提供を行った。また、平成13年11月に設立された特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワークに、活動機会、場所、講師の派遣等、積極的な活動支援を行った。具体的には、平城宮跡の清掃活動への用具等の提供、通常国会記念講演会への講師派遣、市民参加の平城宮跡イベントのグリーンフェスティバル、拓本づくり教室を行った。特に学習会、講演会を積極的に実施、関心は極めて高い。その他、市民参加型の多様な平城宮跡でのイベントは、生涯学習や小中学生の学習の場としても参加者が多く、その基盤実施したアンケートの満足度は概ね99%の満足度であった。	A	各種ボランティア団体への活動場所の提供、またその学習活動への援助など適切に行われており、評価できる。
	・ボランティアに対する学習会実施回数	2回以上	1回 未満	0回 未満	学習会等の開催回数 12回	A	
	・参加者数	150人 以上	150人 未満 120人 以上	120人 未満	学習会への参加者数 3,042人	A	
	・参加者の満足度	80% 以上	80% 未満 64% 以上	64% 未満	母集団：14,932人 調査方法：15、11、2～15、11、22の期間抽出調査 回収数：548 アンケート結果(満足数/回収数)93%	A	
③ミュージアムショップを委託により運営する。	・運営状況	定期的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・平城宮跡資料館のミュージアムショップは社団法人平城宮跡保存協力会に委託し、飛鳥資料館のミュージアムショップは財団法人明日香村観光開発公社に委託し、各種出版物等の委託販売契約を締結している。平城宮跡資料館での出版物販売は4種類、販売は459冊が販売された。また飛鳥資料館での出版物販	A	適切に行われているものと評価できるが、今後は利益面での成果についても視野に入れる必要があると思う。

					売は17種類で販売数は1,434冊で、そのうち図録がよく売れている。また、利用者数は1,893人であった。	
	・ミュージアムショップの利用状況	1,700人以上	1,700人未満 1,400人以上	1,400人未満	利用者数 1,893人	A
④平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等への来訪者に対する満足度への来訪者に対する満足度を調査し、サービス充実の目安とする。	・サービスの充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・平城宮跡資料館、飛鳥資料館展示室、飛鳥藤原宮跡発掘調査部資料室等の公開施設に伴う入館者の満足度調査等のため、アンケートを実施。調査期間は、11月1日～同22日で満足度は、何れも93%・95%・91%が満足したと応えた。今後は、アンケート調査の回収を高め、来訪者の要望等を把握し、サービスの充実を図りたい。	A
	・来訪者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	(公開施設) ①平城宮跡 母集団：14,932人 調査方法：番書調査 回収数：548 アンケート結果(満足数/回収数)93% ②飛鳥資料館 母集団：6,310人 調査方法：番書調査 回収数：2,328 アンケート結果(満足数/回収数)95% ③飛鳥藤原宮跡発掘調査部資料室 母集団：241人 調査方法：番書調査 回収数：47 アンケート結果(満足数/回収数)91%	A
						適切に行われているものと評価できるが、なおアンケートの内容についてさらなる検討が要請される。

中期計画の項目	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定	定性的評価及び留意事項等																									
		A	B	C																												
収入面に関しては、実績を勘案しつつ、外部資金等を積極的に導入することにより、計画的な収支計画による運営を図る。 また、管理業務の効率化を進める観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算によ (2) 収支計画 (3) 資金計画	①決算報告書の区分による予算の執行状況 ②運営費交付金の収益化に関する状況 ③外部研究資金、施設使用料等自己収入の増加状況 ④固定経費の節減状況 ⑤滞付消費税を財源とする流動資産の使用状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			①決算報告書の区分による予算の執行状況（単位：千円） (収入)																											
					<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>予算額</th> <th>決算額</th> <th>差引増減額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>運営費交付金</td> <td>3,086,272</td> <td>3,086,272</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>展示事業等収入</td> <td>20,808</td> <td>42,148</td> <td>-21,340</td> </tr> <tr> <td>受託収入附帯収入</td> <td>28,500</td> <td>188,351</td> <td>-159,851</td> </tr> <tr> <td>その他寄付金等</td> <td>0</td> <td>2,608</td> <td>-2,608</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>3,135,580</td> <td>3,327,688</td> <td>-192,108</td> </tr> </tbody> </table>				予算額	決算額	差引増減額	運営費交付金	3,086,272	3,086,272	0	展示事業等収入	20,808	42,148	-21,340	受託収入附帯収入	28,500	188,351	-159,851	その他寄付金等	0	2,608	-2,608	計	3,135,580	3,327,688	-192,108	
	予算額	決算額	差引増減額																													
運営費交付金	3,086,272	3,086,272	0																													
展示事業等収入	20,808	42,148	-21,340																													
受託収入附帯収入	28,500	188,351	-159,851																													
その他寄付金等	0	2,608	-2,608																													
計	3,135,580	3,327,688	-192,108																													
					(単位：千円)																											
					②運営費交付金の収益化に関する状況 (運営費交付金債務)（単位：千円）																											
					<table border="1"> <thead> <tr> <th>交付年度</th> <th>前年度</th> <th>当年度交付額</th> <th>当期末残額</th> <th>期末残高</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>13年度</td> <td>2,462</td> <td></td> <td></td> <td>2,462</td> </tr> <tr> <td>14年度</td> <td>511</td> <td></td> <td></td> <td>2,973</td> </tr> <tr> <td>15年度</td> <td></td> <td>3,086,272</td> <td>3,086,766</td> <td>2,485</td> </tr> <tr> <td>合 計</td> <td>2,973</td> <td>3,086,272</td> <td>3,086,766</td> <td>2,485</td> </tr> </tbody> </table>			交付年度	前年度	当年度交付額	当期末残額	期末残高	13年度	2,462			2,462	14年度	511			2,973	15年度		3,086,272	3,086,766	2,485	合 計	2,973	3,086,272	3,086,766	2,485
交付年度	前年度	当年度交付額	当期末残額	期末残高																												
13年度	2,462			2,462																												
14年度	511			2,973																												
15年度		3,086,272	3,086,766	2,485																												
合 計	2,973	3,086,272	3,086,766	2,485																												
					(運営費交付金収益)（単位：千円）																											
					<table border="1"> <thead> <tr> <th>業務区分</th> <th>管理費</th> <th>業務費</th> <th>人件費</th> <th>合 計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>13年度</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>511</td> </tr> <tr> <td>14年度</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>511</td> </tr> <tr> <td>15年度</td> <td>456,107</td> <td>840,547</td> <td>1,685,662</td> <td>2,982,316</td> </tr> <tr> <td>合 計</td> <td>456,107</td> <td>840,547</td> <td>1,685,662</td> <td>2,982,316</td> </tr> </tbody> </table>			業務区分	管理費	業務費	人件費	合 計	13年度				511	14年度				511	15年度	456,107	840,547	1,685,662	2,982,316	合 計	456,107	840,547	1,685,662	2,982,316
業務区分	管理費	業務費	人件費	合 計																												
13年度				511																												
14年度				511																												
15年度	456,107	840,547	1,685,662	2,982,316																												
合 計	456,107	840,547	1,685,662	2,982,316																												
					③競争的資金等の導入状況																											
					<ul style="list-style-type: none"> ・科学研究費補助金 直接経費 218,570千円 間接経費 20,550千円 ・その他寄付金・助成金 8,296千円 																											
					自己収入の増加状況																											
					<ul style="list-style-type: none"> ・展示事業等収入 42,148千円（21,340千円） ・受託収入 188,351千円（159,851千円） ・附帯収入 2,608千円（2,608千円） 																											
					④運営費交付金を充当して行う業務の効率化状況																											
					<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>見積額</th> <th>実績額</th> <th>差額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>支出額</td> <td>3,115,677</td> <td>千円</td> <td>511</td> </tr> <tr> <td>差額</td> <td>3,025,453</td> <td>千円</td> <td>90,224</td> </tr> </tbody> </table>				見積額	実績額	差額	支出額	3,115,677	千円	511	差額	3,025,453	千円	90,224													
	見積額	実績額	差額																													
支出額	3,115,677	千円	511																													
差額	3,025,453	千円	90,224																													
					(支出の内訳)																											
					<table border="1"> <tbody> <tr> <td>人件費</td> <td>1,214,124</td> <td>千円</td> </tr> <tr> <td>物件費</td> <td>1,811,329</td> <td>千円</td> </tr> </tbody> </table>			人件費	1,214,124	千円	物件費	1,811,329	千円																			
人件費	1,214,124	千円																														
物件費	1,811,329	千円																														
					⑤滞付消費税を財源とする流動資産の使用状況																											

期首残高	当期使用額	期末残高 (単位：千円)
565,469	0	565,469

人事院勧告による改正にも準拠して、平成15年度は減額措置も行われた。常勤職員数の現員は中期計画に定める範囲内で欠員はないが、予算措置のない自己都合退職による退職手当が発生しなかった場合、人件費予算は45,843千円の未使用残額が認められる。

○法人の自己収入の把握
損益計算書の当期総損失31,067千円となっている。これは予算措置のない自己都合退職による退職手当が生じたためであるが、自己収入は専ら事業等収入が当初予算より21,340千円、補助収入も2,608千円の増額となっている。これは科学研究費補助金に係る間接経費の収入が多かったためであると説明されている。

○受託業務の実績の評価
受託件数は、東京文化財研究所が15件、奈良文化財研究所が22件の計37件で、受託収入は計1,88,351千円である。受託業務は、直接経費の見積額をもとに契約しており、人件費や減価償却費等の間接経費は含まれていない。業務を効率的に実施した場合は相当の利益が発生するが、決算報告書によれば決算額の収支差は4,317千円の収入超過であった。

○運営費交付金を充当して行う業務の効率化は次のとおりであった。(千円)

節減の起点となる基準額
= (運営費交付金 - 特殊要因予算 - 自己収入予算) ÷ (1 - 効率化掛数)
= (3,107,080 - 1,752 - 20,808) ÷ (1 - 0.1)

= 3,084,520 ÷ 0.99
= 3,115,677

運営費交付金からの支出額
= 決算額 - 特殊要因支出額 - 自己収入決算額 - 目的積立金支出額
= 3,251,431 - 106,136 - 33,983 - 85,858

= 3,025,454

効率化率 = (基準額 - 支出額) ÷ 基準額

= (3,115,677 - 3,025,454) ÷ 3,115,677

= 90,223 ÷ 3,115,677

= 2.90%

○省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化を推進するため、冷暖房の省エネ運転等の節電節水に努め、所内LANの活用による回覧文書のペーパーレス化等を図った。この結果、省エネルギーによる光熱水量の節減は、電気料約5,168千円(6.66%)、水道料約1,841千円(11.33%)、ガス料約3,232千円(20.19%)となった。

○運付消費税を財源とする流動資産の使用状況

						流動資産の期末残高のうち、還付消費税相当額は565,460千円である。このうち、当期に中期計画に定める施設整備へ使用されたものはない。以上のことから、実績を勘案しながらも外部資金等を積極的に導入しようとしている。また、当事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努めたといえる。
--	--	--	--	--	--	--

○ 短期借入金 の 限度額

中期計画の項目	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定	定性的評価及び留意事項等
		A	B	C			
短期借入金の限度額は、6億円。短期借入が想定される理由は、運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合である。	・短期借入金の借入状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			短期借入金の借入はない		

○ 剰余金の使途

中期計画の項目	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定	定性的評価及び留意事項等
		A	B	C			
決算において剰余金が発生した場合は、調査・研究、出版事業及び国民に対するサービスの向上に必要な展示施設・設備の整備等に充てる。	・剰余金の使用等の状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			平成13年度及び平成14年度目的積立金102,562,145千円のうち、85,857,960円を執行した。 目的積立金取崩額 28,463,830 円 その他(資産購入) 57,394,130 円 計 85,857,960 円 (内訳) 調査研究事業費 635,580 円 (うち 資産購入額 0 円) 展示出版事業費 46,359,770 円 (うち 資産購入額 42,934,470 円) 情報公開事業費 38,862,680 円 (うち 資産購入額 14,459,660 円)	A	○平成13年度及び14年度目的積立金102,562千円のうち、当期に85,858千円を執行した。内訳は、含目的取崩しが28,464千円、資産購入が57,394千円であった。 ○当期は損失が発生したが、通則法第44条1項積立金を取崩して処理する予定であり、妥当である。

○ その他主務省令で定める業務運営に関する事項

中期計画の項目	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定	定性的評価及び留意事項等
		A	B	C			
<p>1 人事に関する計画</p> <p>(1) 方針</p> <p>① 職員の適正な配置と計画的な人事交流の推進</p> <p>② 職務能率の維持・増進</p> <p>ア 福利厚生の実施</p> <p>イ 職員の能力開発等の推進</p> <p>(2) 人員に係る指標</p> <p>常勤職員については、その職員数の抑制を図る。</p>	・人事管理の状況	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>本年度は東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センターに企画情報研究室を置き、国際交流、協力等の専門的事項についての連絡調整等を円滑に行い、研究業務の効率化を図った。また、人事交流については、国や大学等と積極的に交流を進め、転入10名・転出14名の異動を行った。</p> <p>・転入 (事務系職員)</p> <p>課長級 1名(千葉大学より)</p> <p>課長補佐級 2名(京都大学、大阪大学より)</p> <p>係員級 4名(千葉大学、京都大学、大阪大学より)</p> <p>係員級 2名(東京大学、大阪大学より)</p> <p>(研究職員)</p> <p>室長級 1名(文化庁より)</p> <p>・転出 (事務系職員)</p> <p>課長級 1名(文化庁へ)</p> <p>課長補佐級 2名(京都大学、国立民族学博物館へ)</p> <p>係員級 3名(東京大学、千葉大学、大阪大学へ)</p> <p>(研究職員)</p> <p>部長級 2名(筑波大学へ)</p> <p>室長級 4名(文化庁、東京芸術大学、九州大学へ)</p> <p>・福利厚生 健康診断、人間ドック、常備薬・健康増進器具・貸し出しレジャー用品の購入、レクリエーションなどを実施した。</p> <p>・職員の能力開発 企業会計、簿記、パソコン、英語、労務等に関する研修会を実施し、また、その他各種の研修に出席させるよう努めた。</p> <p><人員に係る指標></p> <p>年度初めの常勤職員数 126人</p> <p>年度末の常勤職員数 121人(理事長・理事含む)</p>	A	<p>全体として概ね適切に運営されているものと評価できる。</p> <p>当研究所の場合、長期計画に基づく研究体制の確立が必要である一方、時代の要請にすばやく対応する研究体制も要求される。国際分野のみならず、東京文化財研究所と奈良文化財研究所の更に合理的な交流と組織の在り方を考慮されたい。また、東西両研究所間の人事交流、特に研究職員の交流についても積極的に実施すべきであろう。</p>		
<p>2 施設・設備の整備を計画的に推進する。</p>	・施設、設備の整備状況	<p>定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施</p>	<p>奈良文化財研究所本庁舎地区施設の再構築を図るために再開発検討委員会及びワーキンググループを設置した。</p> <p>また、公開施設の充実を図るため、黒田記念館の改修工事等を実施した。</p>	A	<p>黒田記念館のバリアフリー改修工事は適切な設備が整備された</p>		